

觀音林遺跡

(第六次発掘調査報告書)



【観音林遺跡出土、大洞C1式期の岩偶】

1988.3.20

青森県五所川原市教育委員会

五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書

- | | | |
|--------|------|-----------|
| 第 1 集 | 1968 | 津軽・前田野目窯址 |
| 第 2 集 | 1974 | 原子遺跡 |
| 第 3 集 | 1975 | 観音林遺跡 |
| ① | | |
| 第 4 集 | 1979 | 狐野遺跡 |
| ① | | |
| 第 5 集 | 1980 | 狐野製鉄遺跡 |
| ② | | |
| 第 6 集 | 1983 | 福泉遺跡 |
| | | |
| 第 7 集 | 1984 | 観音林遺跡 |
| ② | | |
| 第 8 集 | 1985 | 観音林遺跡 |
| ③ | | |
| 第 9 集 | 1986 | 観音林遺跡 |
| ④ | | |
| 第 10 集 | 1987 | 観音林遺跡 |
| ⑤ | | |
| 第 11 集 | 1988 | 観音林遺跡 |
| ⑥ | | |

序 文

五所川原市教育委員会

教育長 高橋清徳

観音林遺跡第六次発掘調査報告書が発刊されるにいたりましたことを、心からおよろこび申し上げます。

昨年7月下旬、私も遺跡発掘の現場をおたずねして、その労苦をねぎらいました。

新谷雄蔵先生を中心に、スタッフの黙々として作業されている雰囲気の中に、熱氣と真剣さがおのずと伝わってきて、大変な根気と研究心が要求される作業だと感銘いたしました。又、スタッフを支える地元の方々のご協力もすばらしいものがあり、感謝申し上げます。

遺跡は埋蔵文化財であることは勿論でありますが、同時に古代へのロマンでもあります。発掘によって、それを学問的に立証するとともに、遺跡の発見、発掘は、現代人に大きな夢を与える、祖先への感謝の念をよびおこさずにはいられません。

この報告書によって、私達は先人の文化の実態を、客観的に後世に伝えることができることをよろこぶものであります。

最後に、風雨に耐えながら、発掘調査にあたられた新谷雄蔵先生はじめ諸先生方、協力を惜しまなかった地元や、各方面にわたる方々に衷心より感謝申し上げ、第六次調査報告書が、次の大きいなる第一歩となることを信じてやみません。

例　　言

1. この報告書は、五所川原市教育委員会が、昭和62年7月17日～8月4日の期間に発掘調査し、その後、出土遺物等を整理し、検討を加えてまとめた観音林遺跡第六次発掘調査の記録である。
2. 本報告書のうち、出土した骨類の鑑定は、早稲田大学金子浩昌氏に依頼した、その結果については〔表Ⅲ〕に示したとおりである。
ここに記して感謝申上げる次第である。
3. また、第六次発掘調査で出土した植物遺存体については、日本植物学会々員木村 啓氏に同定を依頼し、御回答をいただいた。ここに感謝申上げる次第である。
4. 本報告書のうち地学に関する事項は、日本地学教育研究会々員川村真一氏の記述によるものである。
また、石器の岩質鑑定については、調査員伊藤昭雄が担当した。
5. その他、報告書にあるセクション図は、調査員が分担して原図の作成にあたった。
6. その他は、新谷雄蔵が担当したが、土器の復原等は、五所川原市歴史民俗資料館長平山千三郎・佐藤文孝が担当し、土器実測図のトレースは、荒谷順子が一部担当した。
7. また、出土土器が多量なため、青森県北津軽郡金木町立、金木小学校長浅木全一氏、ならびに五所川原市役所船水寛氏の応援を得た。
8. さらに、地形、遺構の測量等、測量にかかる事項は、五所川原市役所建設課北川智章が担当した。
9. 出土した遺物は、すべて五所川原市教育委員会が市立歴史民俗資料館に保管し、歴史研究の資料に活用する。
10. おわりに、第一次調査～第六次調査にわたって種々理解ある御好意を賜わっている地主の長尾良治氏に感謝申上げる次第である。

目 次

序 文

例 言

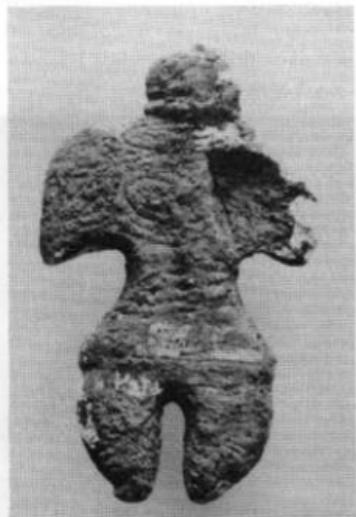
目 次

岩偶写真	N. 1	1
注口土器	N. 2	2
発掘スナップ	写 1～2	3
遺物出土状況（グリットの状況）	写 3～5	5
第1図	観音林遺跡付近地形図	8
第2図	観音林遺跡付近航空写真	9
第3図	観音林遺跡（第一～第六次）発掘調査グリット・トレンチ配置図	10
第4図	観音林遺跡第六次発掘調査区明細図	11
第5図	観音林遺跡基本層序図	12
第6図	観音林遺跡A地区斜面構成層図	13
第7図	A地区K 1～K 2 グリット東壁セクション図	14
第8図	A N 2 地区P 10～P 11 グリット東壁セクション図	15
第9図	A N 2 地区P 12～P 13 グリット東壁セクション図	15
第10図	A N 2 地区O 10～O 13、P 10～P 13、Q 10～Q 11、R 10～R 11における 「Pit 群」実測図（表6 $\frac{1}{3}$ ～ $\frac{3}{5}$ を含む）→pit・土壌出土、土器一覧表（表Ⅳ）	16
〔I〕調査経過と調査要項		17
(1) 第六次発掘調査に至るまでの経過		
(2) 第六次発掘調査		
①調査要項		
⑤グリット・トレンチの設定		
〔II〕地形・層序		24
(1) 地形		
(2) 地質および層序		
〔III〕出土遺構		27
(1) 第一～第五次発掘調査で検出した遺構		
(2) 第六次発掘調査で検出した遺構		
④土壌群		
⑥柱穴状ピット群		
⑦2号井戸		
⑧カマド		

〔表Ⅵ〕 AN 2 地区出土、柱穴、土壤群計測値表（付カマド址）	30
〔表Ⅶ〕 AN 2 地区、土壤群・Pit 群内出土、土器・石器一覧表	
〔IV〕 出土遺物	34
①土製品	
②土 器	
〔表Ⅰ〕 銀音林遺跡出土、土器編年表（縄文時代土器型式編年表を含む）	37
〔表Ⅷ〕 銀音林遺跡出土、完形・復原土器→器形別、型式別分類表	39
〔表Ⅲ〕 銀音林遺跡出土、石器・石製品等一覧表	43
③石製品	
④石 器	
〔表Ⅹ〕 銀音林遺跡出土、骨類鑑定表	55
⑤骨 類	
〔表Ⅺ〕 銀音林遺跡出土、植物遺存体鑑定表	58
⑥植物遺存体	
⑦鉄製品	
⑧岩質参考資料〔表Ⅴ〕 銀音林遺跡出土、岩質参考資料（鉄製品・植物遺存体も含む）	60
〔V〕 考 察	62
☆参考文献	65
・ C・P・L 1～3	
・ A・P・L 1～A・P・L 97, 完形・復原土器	
・ B・P・L 1～4	
・ P・L 1～P・L 37, 破片土器	
・ S・P・L 1～S・P・L 16, 石器・石製品……岩質参考資料No. 1～3	
・ 岩質参考資料（鉄製品を含む）	
・ 植物遺存体（No. 3）	



(A地区K1Ⅱ層出土、岩偶)
☆(泥岩製)



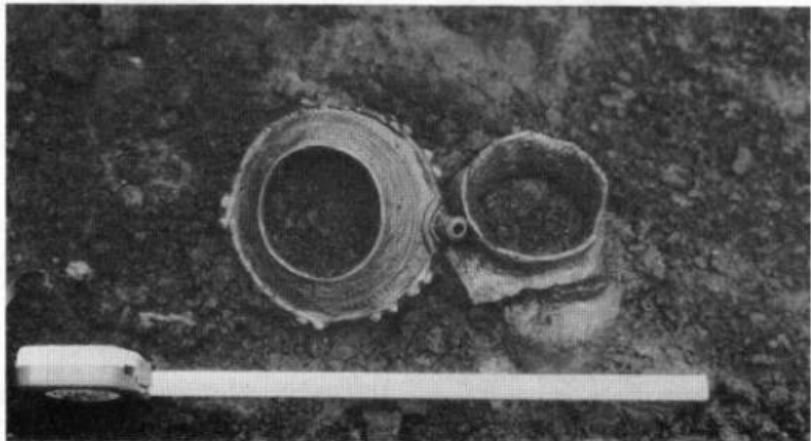
☆ {長径12.0×短径7.5×厚さ1.8cm(最厚部)}



大洞B・C式
注口土器

(出土状況)

(A地区 J2 グリットⅡ層出土)



① A地区J2 グリットの発掘



(西方より)

② 記念写真

☆ S62年度第六次発掘調査に
参加した人々

③ A地区K1 グリットの発掘



(西方より)

④ A地区K2 グリットの発掘



(東方より)

⑤ A地区K1、K2 の境界付近の発掘



(西方より)

⑥ AN2地区O10 グリットのセクション実測



(西方より)

① A地区J2グリットの発掘風景



② A地区J、Kグリットの状況



③ A地区J1Ⅱ層出土の異形土器出土状況



⑤ A地区K1グリットのセクション図の実測風景



④ A地区J2グリット発掘状況

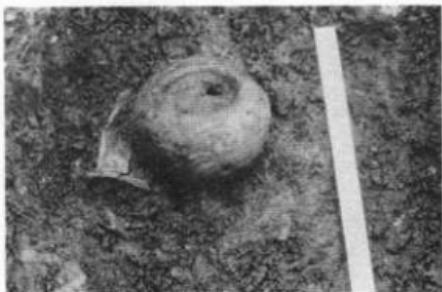


⑥ A地区K1・K2グリット、セクション図の実測風景



(北西より)

① 異形土器の出土状況→③のアップ



② 浅鉢形土器の出土状況



③ 壺形土器の出土状況



④ 小形、鉢形土器の出土状況



⑤ 土偶頭部の出土状況



⑥ 三角形土製品の出土状況



① 注口土器の出土状況



② 台付鉢形土器の出土状況



③ 岩偶の出土状況



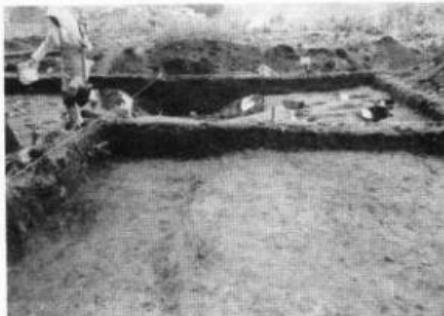
④ ③のアップ



① A地区 J1・J2 グリットの状況



(西方より)

② AN2 地区 O13、P13 グリットの状況
(中央上方に 2号井戸が見える)

(西方より)

③ AN2 地区 O11～12、P12 グリットの土壤、柱穴群の状況



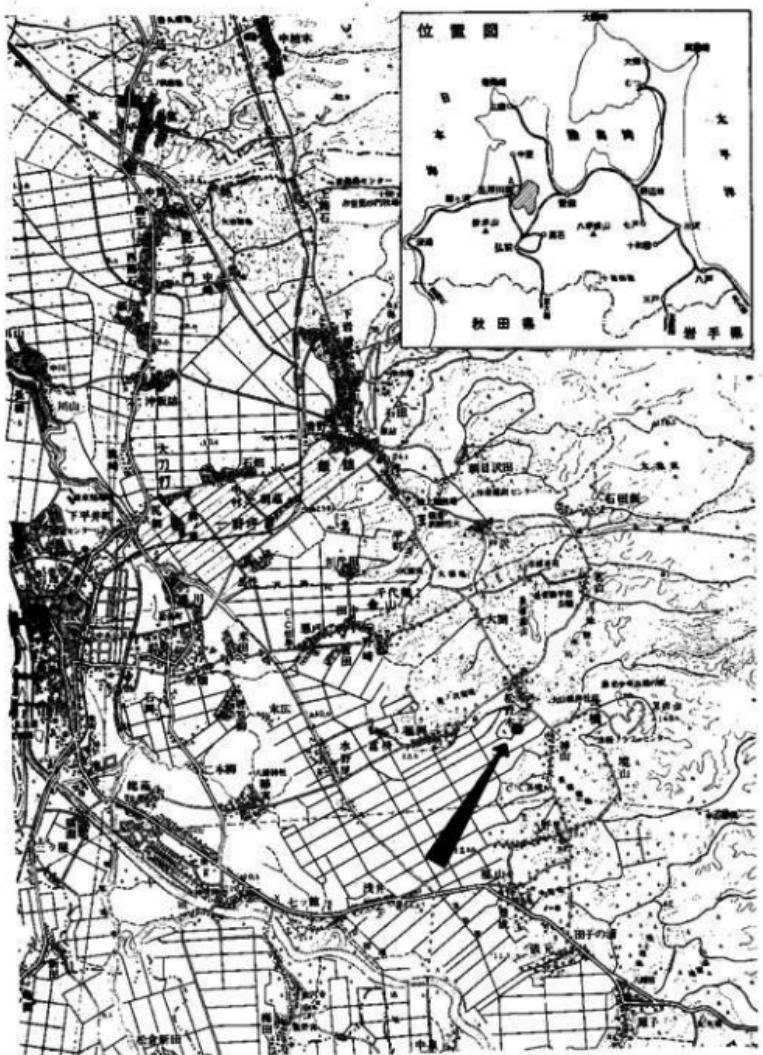
(西方より)

④ A地区 E・F グリットの状況



(北方より)

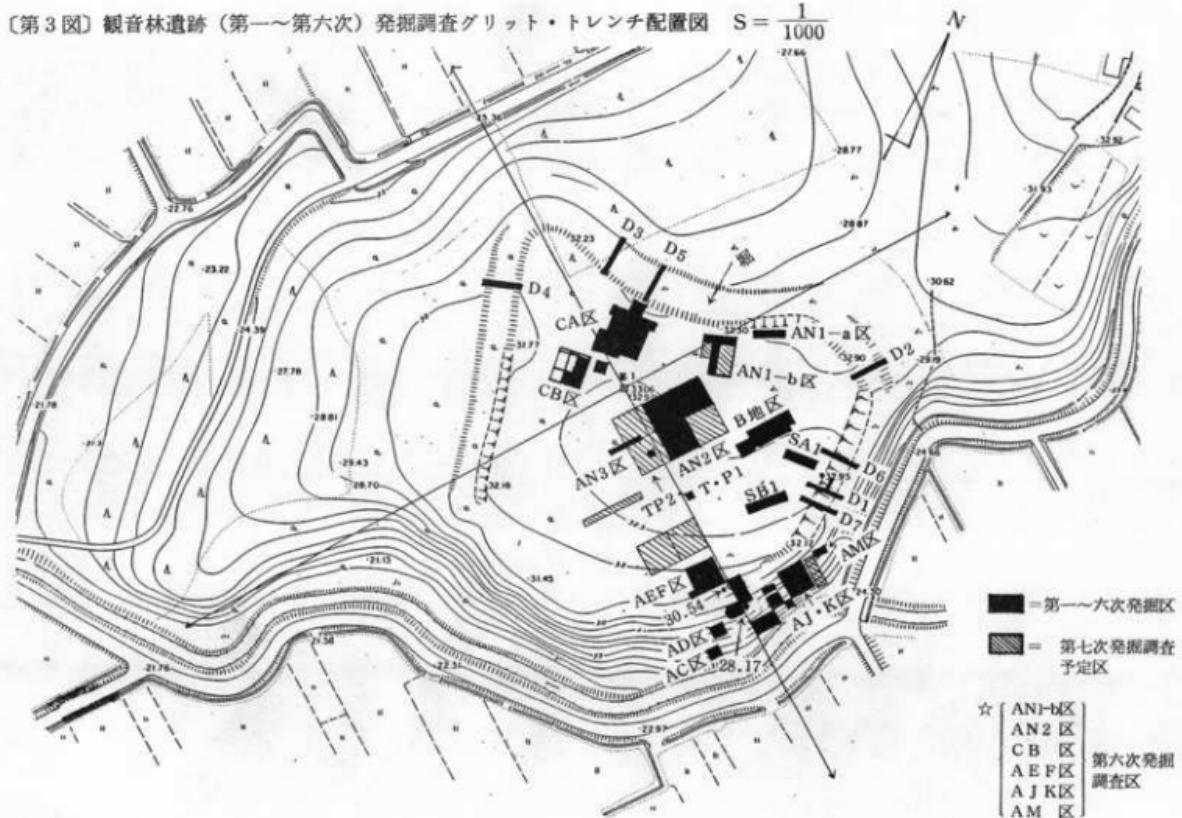
〔第1図〕観音林遺跡付近地形図



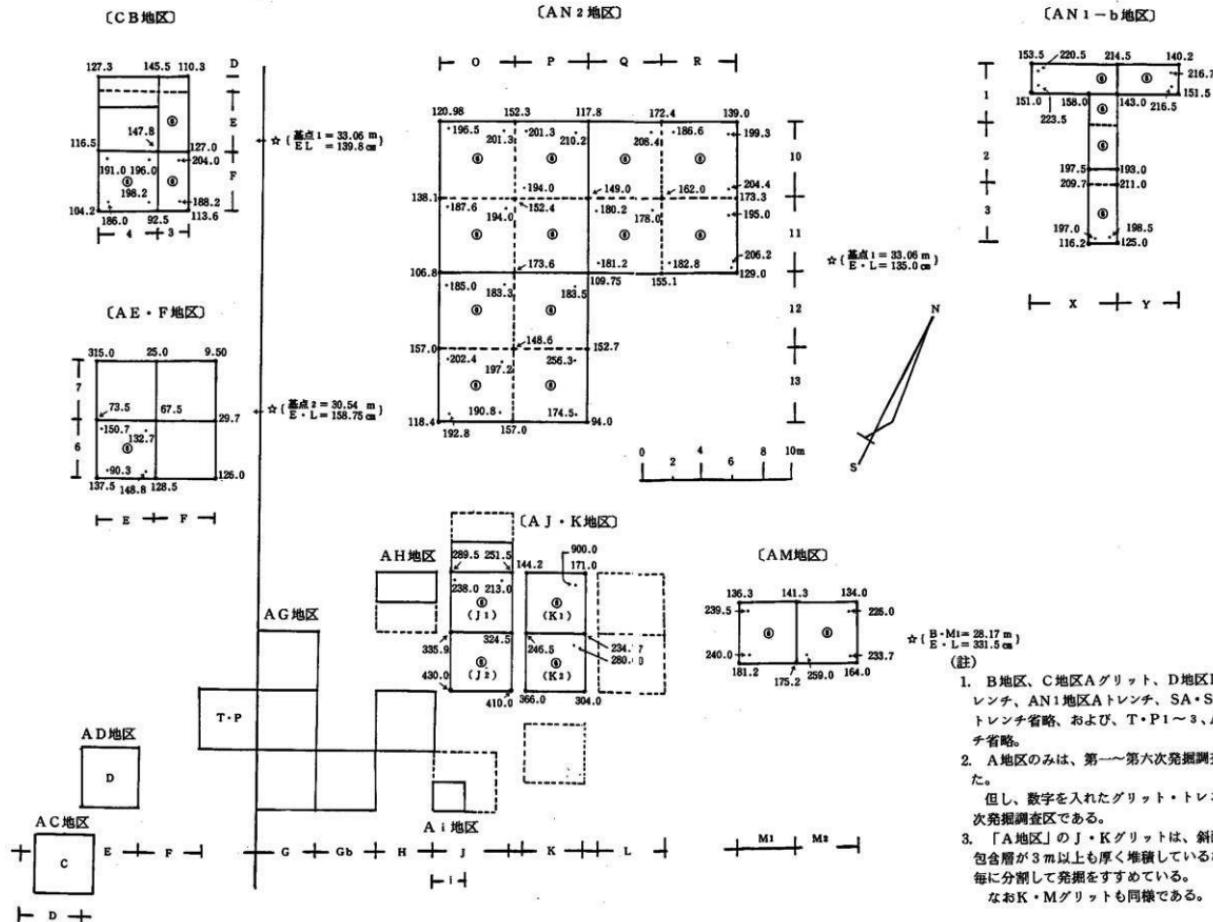
〔第2図〕観音林遺跡・付近航空写真 約 $\frac{1}{1000}$



〔第3図〕観音林遺跡（第一～第六次）発掘調査グリット・トレンチ配置図 $S = \frac{1}{1000}$



[第4図] 銀杏林遺跡 第六次発掘調査区明細図



1. B地区、C地区Aグリット、D地区D1～7トレンチ、AN1地区Aトレンチ、SA・SB地区の各トレンチ省略、および、T・P1～3、AN3トレンチ省略。

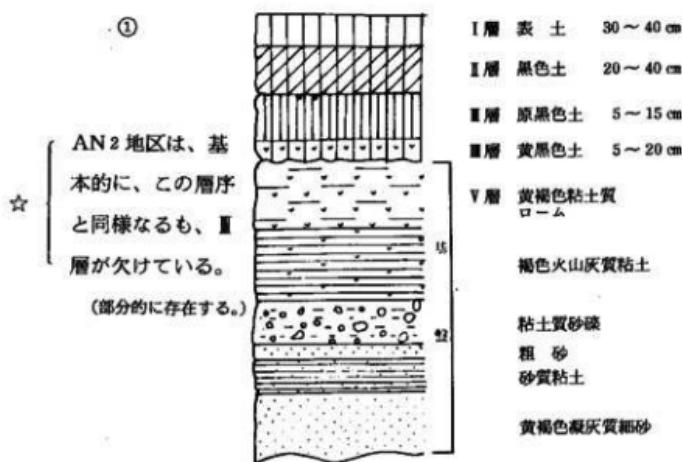
2. A地区のみは、第一～第六次発掘調査区を示した。

但し、数字を入れたグリット・トレンチは第六次発掘調査区である。

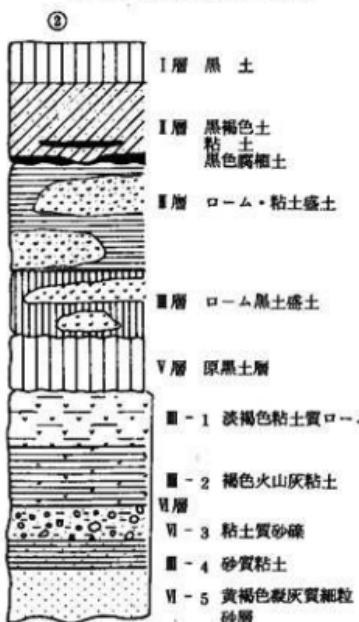
3. 「A地区」のJ・Kグリットは、斜面でもあり、包含層が3m以上も厚く堆積しているため、年次毎に分割して発掘をすすめている。

なおK・Mグリットも同様である。

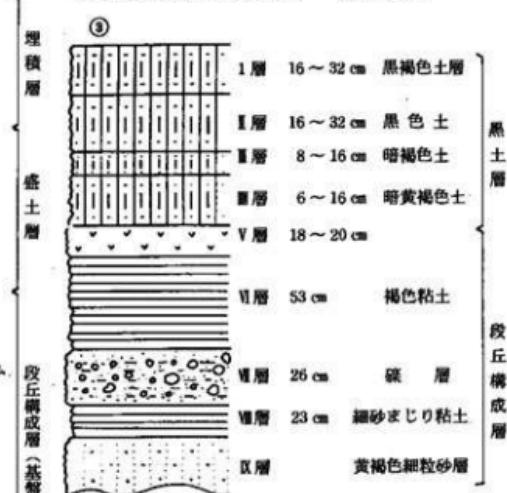
〔第5図〕観音林遺跡・基本層序図



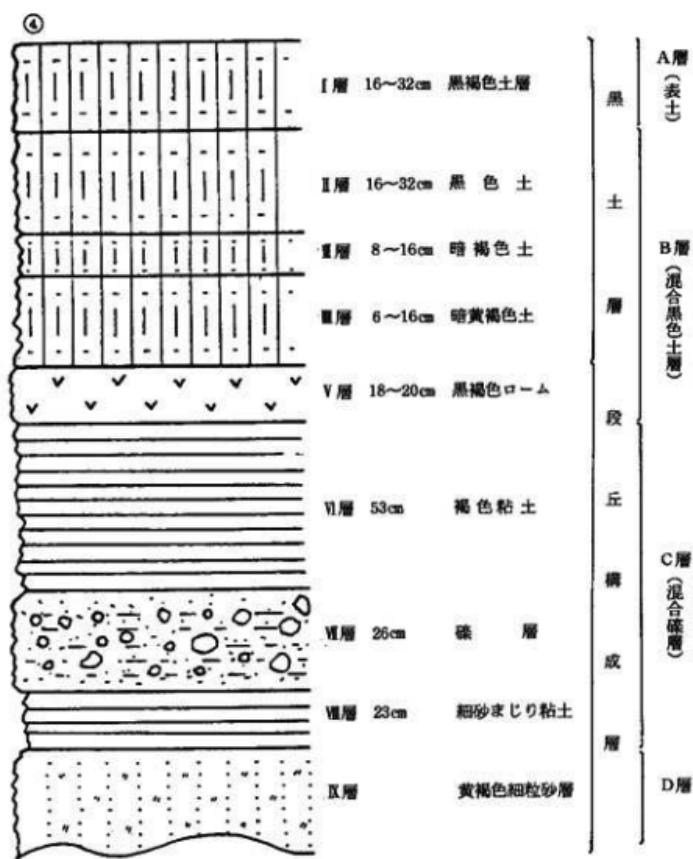
〔D地区縦状遺構基本層序〕



〔観音林遺跡基本層序図〕—〔A地区〕

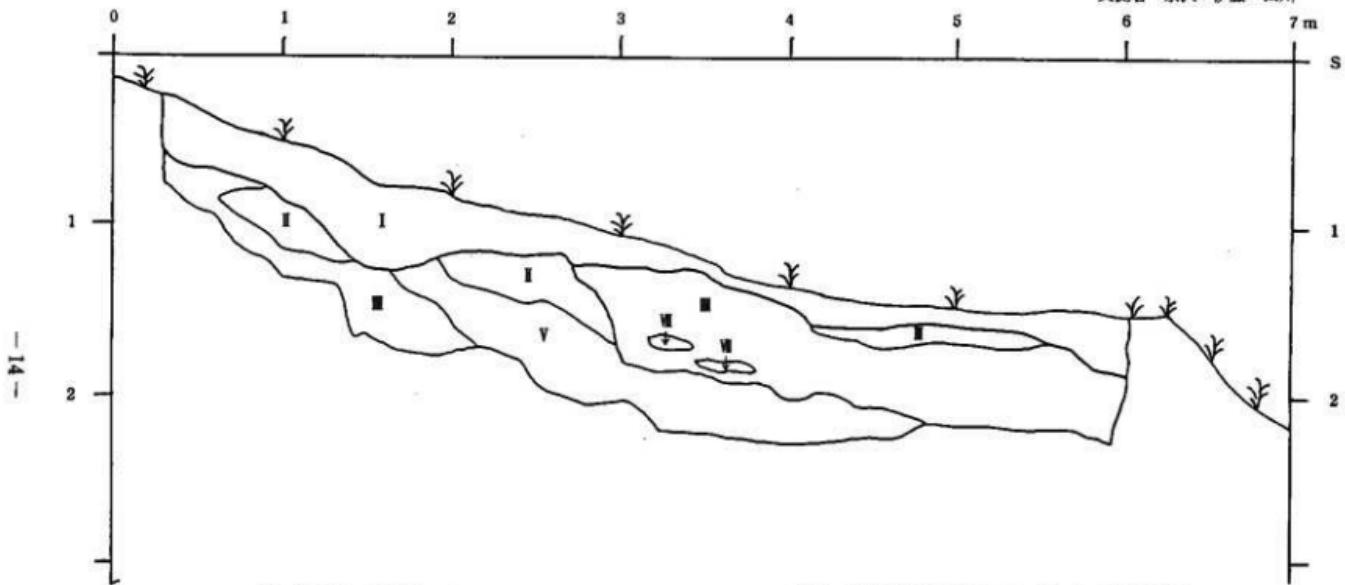


〔第6図〕A地区斜面構成層図(④の詳細図)



〔第7図〕A地区K1～2グリット東壁セクション図 $S = \frac{1}{20}$

実測者 水沢・伊藤・山川

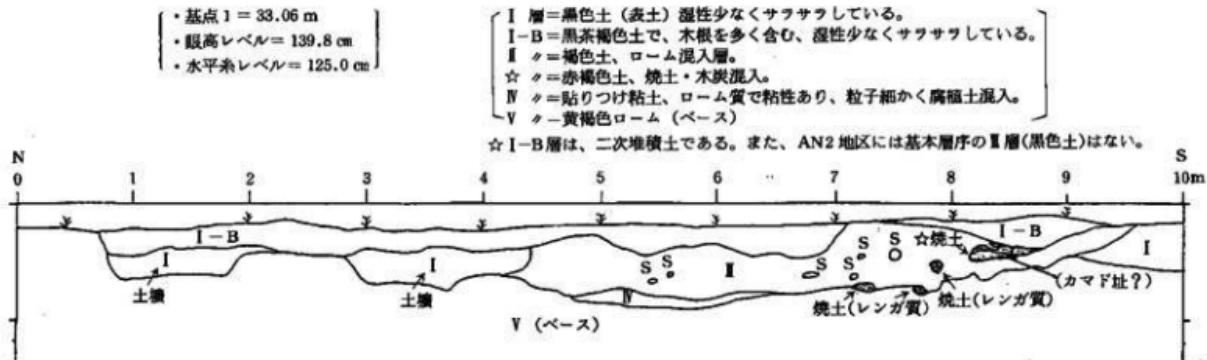


- B + M1 = 28.17 m
- 眼高レベル = 216 cm
- 水平糸レベル = 35 cm

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> I 層 表土（黒褐色土）サラサラしており草木根多し。 II 層 褐色土（木炭含有、ややサラサツしており湿度なし。） III 層 黒褐色土（木根・角礫を含む） IV 層 黄褐色土（粘土質ロームに茶褐色土混入） V 層 茶褐色土（粘性があり、木炭・土器片混入） VI 層 淡黄褐色土（砂質ローム、小円礫含有） VII 層 黄茶褐色土（ブロック状ローム、木炭含有） |
|---|

〔第8図〕AN2地区P10～11グリット東壁セクション図 $S = \frac{1}{20}$

実測者 永沢・伊藤・山川



-15-

〔第9図〕AN2地区P12～13グリット東壁セクション図 $S = \frac{1}{20}$ (☆注・上図Sにつづく)

実測者 永沢・伊藤・山川

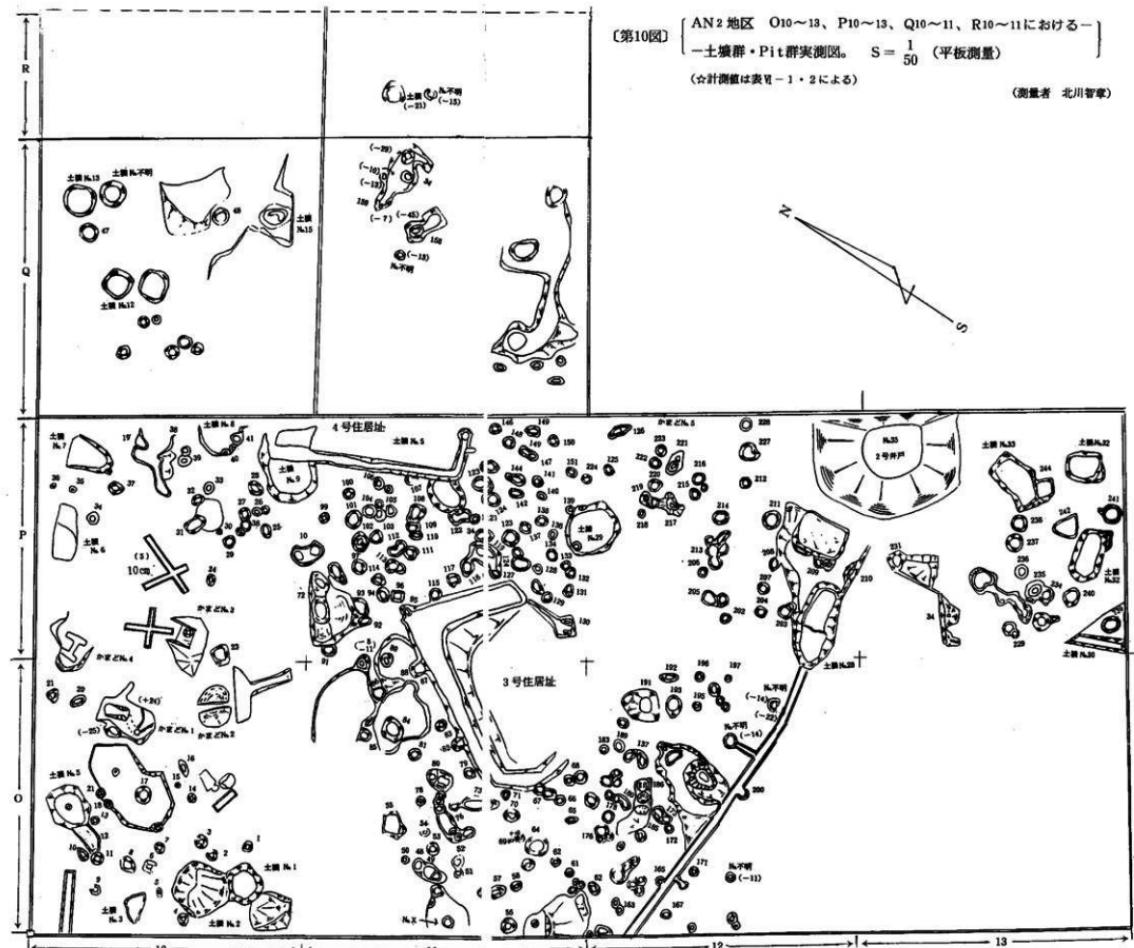


☆ II層以下未完掘 (I・II・III・Vは上図のとおりである。)

①ローム混入褐色土(粘性あり)

②腐植土、やや茶褐色を呈する。

③腐植土、黒色を呈する。



〔I〕 調査経過と調査要項

（1）第六次発掘調査に至るまでの経過

●観音林遺跡は、昭和49年度に第一次試掘調査が行なわれ、わずか $4\text{m} \times 4\text{m}$ の試掘区（A地区）から、縄文時代晚期の土器群が大量に出土した。（ 1.5m^2 拡張区あり）

これらの土器は、大洞C2式土器が主体で当遺跡が縄文時代晚期の一大遺跡であることが判明した。

・その後、昭和58年度になって、地主である長尾良治氏の御好意により、近い将来において開発計画があるとの連絡があったため、五所川原市教育委員会では、発掘調査の計画を策定し、第二次発掘調査を実施した。

・第二次発掘調査は、遺跡の所在する舌状台地を、A地区（南斜面）、B地区（遺跡の東部）、C地区（遺跡の北部）、D地区（堀状遺構）、中央区（台地の中央部）の各区に分け、A地区、B地区、C地区およびD地区の側辺を調査区として選定し発掘調査した。

すなわち、遺跡の中央部を残し、東・南・北の三側辺を調査することにした。

●第二次発掘調査では延べ 163.8m^2 を発掘したのであるが、第二次調査における各地区的状況を簡略に述べる。

〔A地区〕 →この地区は、縄文時代晚期の遺物が出土する地区である。出土土器は大洞C2式土器を中心に、晚期B・C、C1、C2、A式土器が出土した。

〔B地区〕 →この地区では、土壙群が出土した。土壙群のうち1基は縄文時代晚期のもので、他の8基は縄文時代後期のものである。

これらの土壙内外から獸骨片（ニホンシカ・イノシシ等）や鳥骨（ガンカモ）が出土し、いずれも焼骨であることが注目される。

〔C地区〕 →この地区からは、カマド址が検出され、さらに住居址壁面の一部を検出した。すなわち、この地区では、「東北北部の土師器型式」第二型式の土師器を伴う歴史時代（平安期）の遺構が出土した地区である。

〔D地区〕 →この地区は、既述したように、空堀の状態を調査するための地区である。

D地区では、D1トレンチを一本（ $1\text{m} \times 12\text{m}$ ）堀を切って東西に堀る、その結果堀の形態が特異なため、明年度さらにトレンチを入れ確認することにする。

以上が第二次調査の概要である。

●第三次調査は、昭和59年度に252m²を発掘調査した。その概要を述べるとつぎのとおりである。

〔A地区〕→この地区は、第一次・第二次・第三次調査をおして縄文時代晚期の遺物が多量に出土する。第三次調査においても同様であるが包含層が約3mもあって、これだけの厚さを持つ包含層がある以上、台地上の平地に縄文時代晚期の住居址が存在する可能性が予測される。

〔B地区〕→ここでは、小土塁に囲まれた5角形に近い遺構が出土した。この土塁は、第二次調査の項で述べた土壙群を囲んで出土した。また土師器が出土する小土壙1基を検出する。

〔C地区〕→この地区では、第二次調査で検出した、カマドを備えた一号住居址（平安時代後葉）の西半分を発掘するも、I・II層が深く、東半分は明年度に発掘することにする。

〔D地区〕→さきに述べたとおり、D1トレンチによる堀の形態が特異であったため、D2～D5のトレンチを4本南北、東西に堀を横切ってトレンチを設定（1m×12）して掘る。

その結果を検討すると観音林遺跡に所在する空掘は、箱型掘りであると結論づけた。

●第四次発掘調査は、昭和60年度に実施、発掘面積は212m²である。

第一次～第四次調査は予備調査としての最終段階である。

〔A地区〕→さきに述べたとおり、この地区は南斜面で遺跡の中央南端に位置する。包含層は深く、第四次調査では、約1mの深さまで発掘した。（I・II層→表土、黒土の上半）このII層の黒土は、二次堆積層であるが、縄文時代前期・中期・後期・晚期、土師器、須恵器が混在する。

すなわち、晚期のものが層序の下位に、後期のものが上位に多く、さらに土師器・須恵器、前、中期の土器が混入する状態である。

しかしながら、主体を占めるものは、縄文時代晚期大洞C2式土器である。（正常な地層では、古いものが下位に、新しいものは上層に包含するのが普通である。）

このことから、台地の中央部は平坦地をなしており、台地中央部を削平して、その黒土を南斜面・北斜面に二次的に移動させたこと、および遺跡の南端は急斜面をなしていたことによるものと考えられる。このことは、C地区の層序からも推定でき、中央部に黒土層が殆んどなく、V層に30~40cmの深さで達することからも裏付けられる。

〔C地区〕→この地区では、歴史時代の井戸を1基、3号住居址のカマドと壁面の一部、および、2号住居址の柱穴と溝状遺構を検出したが完掘せず。

〔中央区〕→予備調査の最終年度として中央区の一部を発掘した。すなわち AN1 トレンチ、SA1, SB1 トレンチである。(2m × 10m)

また、舌状台地の中央部に南から北へ、T・P1, TP2, TP3(2m × 2m)を設定発掘した。

その結果、SA1, SB1 は遺物の出土ではなく、AN1 トレンチは、縄文時代後期の遺物が多量に出土することが確認された。

また、T・P3において遺構が存在することが確認できたのである。

●第五次発掘調査は、以上第一次～第四次調査の予備調査を受けて、本格的な調査の第一年次である。五所川原市教育委員会では、この本調査を昭和63年まで続ける計画であるが、3ヶ年では全面調査は無理であろう。第五次～第六次発掘調査の推移を検討しながら、第2期発掘計画を策定する必要があろう。

以下、昭和61年度に実施した第五次発掘調査の状況を簡略に述べる。

第五次発掘調査(本格的調査第一年次)では、計 406 m²を発掘調査した。

本格的発掘調査 3ヶ年計画の第一年目であるため、第一～第四次調査にわたる試掘調査と予備調査の結果について再検討を加え、あわせて疑問として残った問題点を解明する必要があったのである。

いま一つは、予備調査においては意識的に台地中央部をさけ、遺跡の北・東・南の三方向より遺跡の周辺地区を調査対象として発掘を進めて来たのであるが、本年度からは遺跡の中心部に発掘区を設定する手がかりを把握する必要があった。

すなわち、第一～第四次調査の総括と本格的調査への第一年度としての発掘区を選定する必要があったのである。

そのため、第四次で発掘した、A地区のE5・F5 J・K グリット。C地区ではAグリッ

ト、X1グリット、Bグリット。遺跡の中央では、AN1・AN3・SA1・SB1のトレーナー、およびT・P1・T・P2・T・P3の各区を対象とし、これらの発掘区において検出した遺構の完掘とその究明が必要であった。

なお、このうち、SA1・SB1・T・P1・TP2には、遺構・遺物等の出土はなく第五次調査では除外した。

他の各区では、遺物・遺構の存在を認めたので、このうち、C地区A・Bグリット、T・P3を含めたAN2グリット、A地区のJ・Kグリット、E5・F5の各グリットを設定して発掘した。

その結果、C地区では、住居址1・2号・1号井戸、およびAN2地区では柱穴群と土壙、A地区では、大量の後期・晩期の土器群が混合層に含まれて出土した。

以上の結果を得たのであるが、A地区のJ・Kグリットの包含層は厚く、さらに掘り下げが必要であった。また、A地区のE5・F5グリットには柱穴群が検出され遺構の存在を予測できた。さらにAN2地区では柱穴、土壙が認められたので拡張して調査する必要があったのである。

以上が第六次発掘調査に至る経過である。

(2) 第六次発掘調査(第4図)

①調査要項

- ・調査目的→個人の私有地内に所在する観音林遺跡が所有者の開畑計画によって消滅する恐れがあるため事前に発掘調査を実施し、記録の保存と遺物の保存を図る緊急発掘調査である。

- ・調査期間→昭和62年7月17日～8月4日

- ・整理期間→昭和62年9月1日～昭和63年3月31日

- ・遺跡名 観音林遺跡

- ・所在地 青森県五所川原市大字松野木字花笠81番地

- ・調査面積 481m²

$$\begin{aligned}
 & A \text{ 地区} \rightarrow E_5 + M_1 + M_2 = 5 \text{ m} \times 5 \text{ m}, 4 \text{ m} \times 8 \text{ m} = 57 \text{ m}^2 \\
 & J_1 + J_2 + K_1 + K_2 = 4 \text{ m} \times 8 \text{ m}, 4 \text{ m} \times 7 \text{ m} = 60 \text{ m}^2 \\
 & A N_2 \text{ 地区} \rightarrow O + P + Q + R_{10 \sim 13} = 10 \text{ m} \times 20 \text{ m}, 10 \text{ m} \times 10 \text{ m} = 300 \text{ m}^2 \\
 & C \text{ 地区} \quad B - F_3 + F_4 = 4 \text{ m} \times 6 \text{ m} = 24 \text{ m}^2 \\
 & A N_1 - b \text{ 地区} \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} X_1, X_2 \\ Y_1, Y_2 \end{array} \right\} = \left\{ \begin{array}{l} 2 \text{ m} \times 6 \text{ m}, 2 \text{ m} \times 4 \text{ m} \\ 2 \text{ m} \times 10 \text{ m} \end{array} \right\} = 40 \text{ m}^2
 \end{aligned}$$

☆発掘主体者 五所川原市教育委員会

代表 教育長 高橋清徳

☆主 管 課 五所川原市教育委員会 社会教育課

○課長 寺田 勇

○課長補佐 小野哲弘

○係長 中村 健

○主査 斎藤 誠

○〃 小田桐 由美子

○主任 木村友行

市立歴史民俗資料館

○館長 平山千三郎

○主事 佐藤文孝

五所川原市都市建設課

○技師 北川智章

○五所川原市税務課主事

船水 寛

☆発掘担当者 ○日本考古学協会々員 新谷雄藏

☆調査員 ○北奥文化研究会々員 小山英治

○〃 太田文雄

○〃 永沢秀夫

○〃 岩崎繁芳

○〃 小野雅史

○〃 菊池由紀子

☆調査員 ○北奥文化研究会々員 伊藤昭雄

○タ 山川夏子

☆調査補助員 ○タ 会津耕作

○タ 阿部勇治

○タ 長尾昭

○青森高等学校 山田健一

☆参加生徒 小泊中生5名

五三中生2名

南小児童1名

松野木小児童1名

☆作業員

長尾秀幸・小笠原正男・長尾義雄・長内義光・長尾種三・仙庭春代

長尾たみ・長内和・長尾由比子・長尾郁子・小笠原喜美江・長尾テル

⑤グリット、トレンチの設定（第3・4図）

・グリット、トレンチは、つぎのように設定した。

①A地区、J・Kグリットを継続発掘するため、東西8mとし、Jグリットは、Kグリットの西側に東西4m、南北8mとし、北側をJ1、南半をJ2グリットとした。

また、東側半分すなわち、東西4m、南北8mをKグリットとし、北側4m×4mをK1・南側4m×4mをK2グリットとした。

・このJ・Kグリットは、同じグリットを第四次発掘調査より継続して発掘しているものである。このJ・Kグリットは、遺物の出土が多く、分層発掘をすゝめているが、包含層は第六次発掘調査終了時でも、未だ包含層が約3m程ある。なおJ1～2は、Ⅲ層まで、K1～2はⅡ層で第六次調査は終っている。

②A地区E5F5グリット、舌状台地の肩部、基線の西側に東西10m、南北10mのグリットを設定するもE5の一部のみ発掘した。

③A地区、Kグリットの東側に約5m離して南北4m、東西8mのAM1～2グリットを組む、急斜面であるため第Ⅰ層で発掘を終了する。

・このグリットは、A地区東側の遺物包蔵地の範囲をつかむねらいである。

④A N 2 地区、南北20m、東西20mとし、西より東へO・P・Q・R、北より南へ10、11、12、13、と番号をつけ、5 m × 5 mを1グリットとする。すなわち、O10～13、P10～13、Q10～11、R10～11とするカギ形の発掘区とした。

・このグリットは、立木を切り倒して開畠予定地になっているため、グリットを大きくした。また、第五次発掘調査で遺構の存在が予知できたから、それを調査する目的である。

⑤C地区BグリットE 3～4 F 3～4区、このグリットは第四、五次発掘で住居址を発掘し（2号住居址）、住居址に付属する土壌の存在を認めたので調査するねらいであった。

グリットは、南北6m、東西6mとし、そのうち南北6m、東西2mは第五次発掘面である。

⑥A N 1-b地区、この地区は、北側空堀に、東西に平行させ、既発掘のA N 1トレンチの西側に設定、東西10m、南北2mのトレンチと、それに直行する。南北10m、東西2mのトレンチを設定する。

・このトレンチ設定のねらいは、後期の土器が出土する地区であるので、その解明がねらいであったが、第Ⅰ層のみで発掘は終った。

次回に発掘したいと考えている。以上がグリット、トレンチの設定と若干の設定理由である。

〔Ⅱ〕 地形・層序（第1，2，3，5，6図）

（1）地形

本遺跡は、五所川原市の東方約5km、松野木部落の南端にあって、五所川原駅前より弘南バスにて約20分、南松野木バス停留所下車、約10分の西方舌状台地上に位置する。

この台地は、最も高い地点で標高約33,283m（B・M3）であって西南方向に突出する台地である。

この地域には、松野木川が県道福山・五所川原線を横切っており、この周辺には、長者森山・焼山・鶴野等の遺跡が梵珠山系の山麓に点在している。

松野木地区の地形を大きく分けると、東方から西方へ向って、中山山脈の南端を占める梵珠山地（標高500～300m）、それに続く大駅廻丘陵（標高200～100m）、前田野目台地（標高70～30m）および津軽平野の四つに区分することができる。

この松野木台地は、既述の前田野目台地上に位置しており、北は天神川、南は松野木川によって挟まれた部分を占めている。

前田野目台地は、海成段丘で津軽平野の東縁に原子・野里・松野木・飯詰と連続して分布しており、この台地を梵珠山地に源をもつ小河川が浸食によって谷をつくり寸断している。この開析谷には境ノ沢溜池・長橋溜池など多くの溜池がつくられている。

前田野目台地は面高度によって3面に細区分ができる。すなわち、標高50～70mのⅠ面、30～40mのⅡ面、20～30mのⅢ面に分けられる。松野木地区は、このⅡ面上にある。

観音林遺跡は、この松野木台地の南西端部にある。この台地は、その北側を流れる松野木川の浸食によって舌状台地となっており、標高は25～30mを示しⅢ面に連続している。

遺跡の南方一帯は小規模ながら松野木川および、その支流の形成した扇状地となっている。

なお、遺跡の北側約0.3km付近を西流する松野木川は、津軽平野を北流して十川と合流するが、一部は境ノ沢溜池に注いでいる。

（2）地質および層序（第5・6図）

本遺跡の基本層序は第5・6図（C・D・A）に示すとおりである。

遺跡のベースをなすのは、Ⅴ層のローム層で、遺物の包含層はⅡ～Ⅳ層である。

Ⅳ～Ⅰ層までは段丘の構成層で遺物の出土とは直接的には関係ないが、遺跡内で発見さ

れた歴史時代のものと考えられる空掘の構造との関係から特に記載することにした。なお、この段丘の基盤をなすのはⅩ層の凝灰質細粒砂層である。以下に各層の特徴を述べる。

☆層序（第5・6図）

- I層・黒褐色を呈しており、草木根が多数混入する腐植土で表土を形成する。
- II層・黒色土で粒子が細かく、さらさらしており直径1mm程度の粗砂を混入する。
- III層・黒色土に粘土が混入したもので、細砂を含み粘性がある。暗黄褐色を呈する。
- IV層・ローム層から黒土への漸移層で粘性が強く、暗黄褐色を呈する。
- V層・粘性の強い黒褐色均質ロームで、まれに石英粒がみられる。
- VI層・黄褐色で粘性の強い粘土である。
- VII層・粘土・砂および直径数cm程度の主に亜角礫層で段丘疊である。
- VIII層・凝灰質細砂まじりの粘土で下层数cmはオレンジ色を呈する。
- IX層・遺跡をのせる段丘の基盤をなす層で黄褐色凝灰質細粒砂層である。

以上が、当観音林遺跡における基本層序であるが、前々回の調査（第四次）では、C地区C2グリットの発掘調査において得た観察の結果、基本的に既述の層序と同様なるも、C地区における基本層序図（第5図）に掲げることにする。

☆C地区基本層序（第5図-①）

- I層・表土で草木根が多数混入する腐植土である。
- II層・黒色土で粒子が細かく、さらさらしており、直径1mm程度の粗砂を混入しており、前記のII層と同様である。
- III層・原黒色土である。粒子が細かく、粗砂も混入することは、II層と同質であるが、しまりがあり、粘質もややある。
- IV層・黄黒色土で、V層の粘土質ロームも混入しており、III層からV層へうつる漸移層である。
- V層・黄褐色粘土質ロームである。均質ロームで粘性も大である。

以深は、本台地の基盤をなす層で、第5図-③④に同じである。当遺跡は、この層序のI～III層に遺物が含まれているが、特にII・III層が濃密である。また、検出された遺構は、いずれもV層を掘りこんでいるものであった。このV層以深は、本舌状台地の基盤をなす層（V～IX層）であって、既述したとおり壇状遺構との関係からV～IX層を基本層序として示した。

また、（第七・八・九図）には、A地区K1—2グリットの東壁セクション図とAN2地区P10～13東壁セクション図を示してある。これによって、層序の状況を理解されれば幸いである。

〔Ⅲ〕出土遺構（第4・8・9・10図、表Ⅵ、Ⅶ）

（1）第一～第五次発掘調査で検出した遺構

●第一次（S・49）試掘調査

①小土壙 ②焼土遺構

●第二次（S・58）予備調査

③焼土遺構 ④土壙群（9基）

●第三次（S・59）予備調査

⑤小土塁 ⑥1号住居址の一部検出

⑦空堀の原型確認

●第四次（S・60）予備調査

⑧1号住居址西側半分検出

⑨1号井戸を確認 ⑩2号住居址検出

●第五次（S・61）本調査

⑪1号住居址完掘 ⑫2号住居址完掘

⑬柱穴群（A地区E5 F5）、⑭柱穴群、（AN2地区）

・以上が第一～第五次発掘調査において検出した主な遺構である。これらの諸遺構については、報告書に詳述しているので省略する。

（2）第六次発掘調査で検出した遺構

⑮土壙群（第10図、表Ⅷ）

・土壙群は、AN2地区で、全部で33基検出したが、このうち、No.5としたものは、一部破壊されているが後述するとして、土壙は32基となる。

これらの土壙は、第五図に示すV層を掘り込んで構築されている。

（表Ⅷ-1）に示す深さは、確認面より計測したものである。（第4図）には、AN2地区各グリットのG・Hと第V層上面の深さを計算できるように表示しているが、そのV層上面を確認面とした。

土壙No.1～No.33（No.5→住居址）の個々について述べる紙数に乏しいので図面（第10図）にゆずり、他は省略したい。

また、O. P-11グリットから3号・4号とした住居址を検出したが3号住居址は深く一部埋められていた。また、4号住居址は、(表VI-N_o5)立木のため、次回に詳述したい。

(第10図)において、空白の面は、立木のため発掘不能な面である。

⑤柱穴状ピット群(表VI-1, 第10図)

・柱穴状ピットは、(AN2-O・P・Q・R10~13) 20m×10m, 10m×10m 計300m²において、252こを検出した。これらのピットの計測値は、(表VI-1)に示してある。

・これらのpitは、第V層を掘り込んで構築されているものが殆んどであるが、N_oXとしたピット(O11西壁中央より)は第II層の中位において確認したものである。

・他のもののうち、堀り方のないピットは、第II層より打ち込んだ可能性もあるが、注意して作業をするめが確認できなかった。

pitの形状は、①円形、②方形、③表面方形で中央より円形になるもの、④2~4こ連続するもの、⑤pitの周辺を土墨でフチをつけ高くするもの、⑥pitの中に段のつくもの、⑦既述したように、堀り方のあるもの、⑧堀り方のないもの等、分類すると、8種に分類が可能である。

・この252この柱穴状ピットおよび土壙内から土器片が出土した。

この出土土器については、〔表VI〕に示してある。すなわち、後期十腰内I式土器・晚期大洞C1~A式の土器片が多く、土師器・および前期・中期の土器片が出土している。

(表VI参照)しかしこれらの土器片でピットの時期を考える資料にはならない。このAN2地区には、(第5図)に示す第II層(原黒土)がなく削平されているから、まぎれ込んだものと考えるのが妥当であろう。

⑥2号井戸(第9・10・図 表VI, VII)

・この2号井戸としたものは、AN2地区P12~13グリットII層下で検出したものである。このものは、第六次発掘調査では、第9図のセクション図にあるとおり、1.2mの深さまで掘っただけで未完掘のものである。

井戸の南北径約3.7m、中央の円で約1.5mの径を持つ円形プランであるが未完掘である。

・また、第10図にあるとおり、O12西壁より、P12南壁から井戸に溝状遺構が直線的に伸びている。この溝状遺構の性格等は未解決であって、第七次発掘調査で追求したいと考える。

③カマド（第10図、表VII-1）

・カマドは、AN2地区で5基検出した。そのうち、No.1～No.2としたものは、O10～P10に集中して出土した。またNo.5としたものは、P12の東壁にて検出したが、ベルトのため図にはあらわれない。

・このNo.1～No.5としたカマドのうち、No.1は、Ⅱ層下位で検出したものである。他のNo.2～No.3はⅣ層上面、Ⅴ層上面でそれぞれ検出した。また、No.5としたものは、やはりⅡ層で検出した。

以上のように、No.1、No.5はⅡ層、No.2はⅣ層、No.3はⅤ層上面と検出層序が異なっている。このことから三時期に分けて考えることができるようである。

☆すなわち、既述の住居址、ピット、カマドの検出層位を考えると、生活面を三面として捉え、土壙群を含めて、三つの時期に整理したいのであるが、きめ手を欠いたのが残念であった。この問題は、第二～第六次発掘結果を含めて、空堀の年代決定にもかゝわる残された問題である。

〔表V-1〕 AN2 地区出土、柱穴群計測値表

深さ=h(cm) → (確認面より)

No.	h	No.	h														
1	30	29	33	57	17	85	42	113	32	141	13	169		197	8	225	
2	10	30	7	58	11	86	8	114	14	142	11	170		198		226	
3	12	31	10	59		87	17	115	24	143	20	171		199		227	
4	16	32	14	60		88	19	116		144	5	172	13	200		228	
5	17	33	25	61	18	89	15	117	10	145		173	8	201		229	
6	14	34	33	62	46	90	8	118	27	146	13	174		202	25	230	
7	10	35	9	63		91	28	119	28	147	17	175		203	45	231	
8	12	36	9	64	12	92	18	120		148	7	176	17	204	16	232	
9	16	37	12	65	14	93	11	121	23	149	15	177		205	13	233	
10	16	38	17	66	17	94	18	122		150	9	178	14	206	26	234	
11	16	39	11	67	23	95	5	123	26	151	7	179	20	207	13	235	
12	5	40	21	68	18	96		124	22	152		180		208	17	236	
13	21	41	20	69	7	97	17	125	10	153	10	181	14	209	15	237	
14	5	42		70	12	98		126	20	154		182	17	210	50	238	
15	12	43	4	71	13	99	8	127	23	155	9	183		211	25	239	
16	32	44	8	72		100	14	128		156	12	184	15	212	30	240	
17	33	45	12	73	36	101	9	129	11	157		185	23	213	12	241	
18		46	7	74		102	6	130	16	158	23	186	26	214	11	242	
19		47		75		103	9	131	12	159	7	187	16	215	21	243	
20	6	48	34	76	12	104	16	132	24	160		188		216	10	244	
21	12	49	52	77		105	26	133	10	161		189	18	217	12	245	
22		50		78	8	106	12	134	10	162		190		218	7	246	
23	16	51	12	79	16	107	16	135		163		191	34	219	26	247	
24	14	52	28	80		108	25	136	8	164		192	28	220	20	248	
25	5	53	22	81	25	109	12	137	19	165		193	34	221	27	249	
26	5	54	42	82		110	11	138	18	166		194		222	8	250	
27	38	55	16	83	23	111	19	139	15	167		195	14	223	12	251	
28	17	56	5	84	8	112	13	140	8	168		196	6	224	19	252	

〔表VI-2〕 AN2 地区出土、土壤群計測値表（付カマド址）

土溝 N _o	h	土壤 N _o	h	カマド								
1	80	28	53	かまど1								
2		29	5	2								
3		30	56	3								
4		31		4								
5	住居地	33	62 60	5								
6	25		37									
7	9											
8	-	井戸 N _o 35	表土から 115									
9	-											
10												
11												
12	10											
13	5											
14												
15	15											
16												
17												
18												
19												
20												
21												
22												
23												
24												
25												
26												
27												
28												

〔表9〕AN2地区、土壤群・pit群内出土、土器・石器一覧表

グリッド	pit・土壤	記	録	備考
O10 G	土 滅 4	/	十腰内I式 5 大洞 C2式 1	土師器 2
	土 滅 5	/	十腰内I式 5 タク C1式 1	/
	炉址 10	/	十腰内I式 1 タク C2式 1	
	pit 17	/	十腰内I式 1	/
	炉址 1	/	十腰内I式 3	土師器 1
O11 G	土 滅 5	/	十腰内I式 1	/
	土 滅 18	/	十腰内I式 3	土師器 1
	pit 5	前期 3	大洞 C1式 1	/
	溝 状 道	前期 2 中期 1	十腰内I式 6 タク C2式 1	土師器 1
O12 G	pit 200	中期 1		/
	pit 190	/	十腰内I式 6 タク C2式 1	/
	pit 191	/	タク C2式 1 A式 1	/
	土 滅 27	前期 2	十腰内I式 3	/
	溝 状 道	/	タク C2式 1	/
	pit 16	/	タク C2式 1	/
P10 G	土 滅 9	/	タク C2式 1	/
	土 滅 6	/	十腰内I式 1	/
	炉 地 3	/	タク C2式 2 A式 1	/
	pit 30	/	十腰内I式 6	/
	pit 38	/	十腰内I式 2 タク A式 1	/
	pit 37	/	十腰内I式 1 タク C2式 4	/
	pit 28	/		土師器 1
	炉 地 3	/		土師器 1
P11 G	土 滅 9	前期 1	十腰内I式 3 タク C2式 5	/
	土 滅 6	/	十腰内I式 2	/
	炉 地 5	/	十腰内I式 4 タク C2式 3 A式 1	土師器 6
	炉 地 21	/	タク C2式 1	/
	土 滅 21	/	十腰内I式 1 タク C2式 1	/
	pit 21	前期 1	十腰内I式 1	/
	炉 地 28	/	タク C2式 1	/
	pit 12	/	十腰内I式 2 タク C2式 1	/

クリット・土壙		記録			備考
P11 G	p i t 127	/	十腰内I式 5	大洞 C2式 1	/
	p i t 131	/		タタ C2式 3	/
	p i t 132	/	十腰内I式 3		/
	p i t 130	/		タタ C1式 2 C2式 1	/
	p i t 108	/	十腰内I式 1		土師器 1
	p i t 137	/	十腰内I式 2	タタ C2式 1	土師器 1
	p i t 119	/	十腰内I式 1	タタ C1式 1 C2式 2	土師器 3
	p i t 112	/	十腰内I式 1	タタ C2式 1	/
	p i t 96	/	十腰内I式 1		スクレーパー(横形)
	p i t 144	/	十腰内I式 1		/
	p i t 142	/	十腰内I式 1	タタ C2式 2	/
	p i t 146	/		タタ C2式 2	/
	p i t 147	前期 2			スクレーパー(横形)
	土 壇 28	/		タタ C2式 1	/
	p i t 12	/	十腰内I式 1		/
P12	p i t 200	前期 2	十腰内I式 5		/
	p i t 211	/	十腰内I式 1 II式 1	タタ C1式 1 C2式 3	土師器 5
	p i t 219	/		タタ C2式 1	/
	p i t 28	前期 1			/
	土 壇 28	/	十腰内I式 2		/
P13	p i t 236	/	十腰内I式 3		土師器 1
	土 壇 31	前期 1	十腰内I式 2	タタ C2式 1	/
	土 壇 33	/	十腰内I式 3		/
Q10 G	p i t 39	/	十腰内I式 2	タタ C2式 1	土師器 1
備 考	<p>☆数字は、ピット・土壙内より出土した土器片数である。</p> <p>☆前期・中期は、破片のため型式名は不明である。</p> <p>☆備考に示した石器は、S・P・L1~16には入れていない。</p>				

[IV] 出土遺物（表 I, 第 3・4・5 図）

② 土製品 (C・P・L1~3, A・P・L6)

・ 土製品としたものは、(C・P・L1~3, A・P・L6) に示したものである。それを列記すると次のとおりである。

-
- | | |
|------------|--------------|
| ① 鐸状土器 - 3 | ② 三角形土製品 - 3 |
| ③ 土偶脚部 - 4 | ④ 土偶頭部 - 2 |
| ⑤ 土偶胴部 - 2 | ⑥ 異形土器 - 1 |
-

・ 以上の15点である。このうち、①は2形態に分けられるが、後期十腰内I式期のものである。(C・P・L1-1・2・3, C・P・L2-1・2・3)

② 三角形土製品の3点は(CPL1-9・10・11, C・P・L2-10・11)、いずれも後期十腰内I式期のものである。

③ 土偶脚部は、いずれも別個体のもので、このものも、その形態から後期十腰内I式期のものである。

④ 土偶頭部 (C・P・L3-3・4)、このものは、(3)は晩期大洞A式期のもので、この土偶の目にはアスファルトを詰めている珍しいタイプである。

なお、第五次発掘調査においても目にアスファルトを詰めたものが1点出土している。

・ いま一つは、(C・P・L3-4) これも晩期大洞A式期のものである。

⑤ 土偶胴部 (C・P・L3-1・2) としたもののうち、(1)は板状土偶のもので、縄文時代中期のものである。

・ (C・P・L3-2) としたものは、後期十腰内I式期のものである。

⑥ 異形土器 (A・P・L6-6) としたものは、その施文から後期十腰内I式期のものであろうが、類例を待って考えたい。

現在のところ、その機能・用途等は不明である。

以上、土製品15点について述べたが、中期・後期・晩期の土製品が出土した。

・ また、(C・P・L1-4・5・8) としたものは、後期→(4・8)、晩期→(5) の注口土器である。

・また、(C・P・L1-6・7・12)は、袖珍土器で、(6)は、台付浅鉢形・(7・12)は、鉢形、塊形土器である。いずれも晩期のものであるが型式名は、大洞C2式の可能性が高い。

以上、第六次発掘調査で出土した土製品・袖珍土器について簡単に述べた。

⑥土器 (A・P・L1~97, B・P・L1~4, P・L1~37)

・出土した土器群は、(60×28×15cm)の箱で約50箱の出土である。これらの出土土器のうち完形・復原土器は、A・P・L1~97に、破片土器は、B・P・L1~4、P・L1~37に分けて示してある。

・出土の多い地区を述べると、遺物の多い地区は、A地区J1~2、K1~2グリットで、このグリットは、年次計画で表土より60cm、60~80cm、80~1m20と年次を分け、分層発掘を続けて来た地区である。

その理由は、遺物の出土量が多く、斜面であるため、発掘に時間がかかる地区のためである。

このJ・Kグリットは、第六次発掘を終っても包含層は、約3m程残っている。

この地区では、後期、晚期の土器が多量に出土した。

・つぎに多い地区は、AN2地区であるが、この地区は、後期・晚期・土師器、須恵器が出土したが、既述のように、この地区は土壙群、柱穴群の遺構が多くある地区で、遺物の出土状況は混在する。

・AM1~2地区は、急坂な地点でI層のみの発掘で遺物の出土は少ない。

・AN1-b地区は、主として後期の土器群が出土する地区であるが、表土の剥ぎとりで終った。

第七次発掘に期待したい。土器群の出土は少ない。

・CB地区は、土壙精査のため発掘した地区であるが遺物は少ない。

以上、第六次発掘調査における土器群の出土状況を簡単に述べたが、つぎに出土した土器群について述べる。

觀音林遺跡出土、土器編年表

(縄文時代土器型式編年表を含む)

(表 I)

推定年代	区分	土器型式	觀音林第一次 S 49. 試掘	觀音林第二次 S 58. 予備	觀音林第三次 S 59. 予備	觀音林第四次 第1期 S 60. 本調査	觀音林第五次 第1期 S 61. 本調査	觀音林第六次発掘 調査、第1期終了 S 62. 本調査		
12000 k	草早期	/	/	/	/	/	/	/	出土 土器 群別	
6000 k	縄文時代 前期	円 a式 筒 b式 下 c式 層 d1式 式 d2式		/	円筒下層式 a式	円筒下層式 a式	円筒下層式 a式	円筒下層式 (+)	第一群	
5000					d2式	d1式	d式			
k	中期	円 a式 筒 b式 c式 上 d1式 層 d2式 e式		円筒上層式 b式	円筒上層式 b式	b式	(+)	円筒上層式 (+)	第二群	
4000			/	/	/	/	/	/		
k	後期	I式 (+)式 十層内 I式 II式 III式 IV式 V式 VI式	十層内 I式	十層内 I式	十層内 I式	十層内 I式	十層内 I式 (+)	十層内 I式 (+)	第三群 第四群 第五群	
3000			/	/	/	/	/	/		
k	晚期	B式 大洞式 B+C式 C1式 C2式 亀C2式 ケ(C2-A)式 筒(C2-A)式 式A式 A'式	大洞式	大洞式 B+C式 C1式 C2式 (C2-A)式 A式	大洞式 B+C式 C1式 C2式 (C2-A)式 A式	大洞式 B+C式 C1式 C2式 (C2-A)式 A式	大洞式 B+C式 C1式 C2式 (C2-A)式 A式	大洞式 B+C式 C1式 C2式 (C2-A)式 A式	第六群 第七群 第八群 第九群 第十群	
2000										
B+C 300 AD 300	弥生時代	/	/	/	/	/	/	/	/	
k	歴史時代	土師器 第一型式 第二型式 須恵器	土師器 ・第二型式 ○須恵器 ○株洲焼	○土師器 ・第二型式 ○須恵器	○土師器 ・第二型式 ○須恵器 ○鐵器	○土師器 ・第二型式 ○須恵器 ○陶器	○土師器 ・第二型式 ○須恵器 ○鐵器	○土師器 ・第二型式 ○須恵器 ○鐵器	/	第二群 第五群
800										
備考	☆……前期・中期の(+)は、型式名不明、後期→第五・六次(+)は、本文参照のこと。また、 晚期(C2-A)は、C2式、A式の中間の施文要素をもつ上器群の仮称型式である。									

☆〔出土、土器群の分類と編年〕—(表Ⅰ)

当観音林遺跡で出土した土器群の編年については、(表Ⅰ)に示したとおりであるが、第六次発掘調査で出土した土器群を(表Ⅰ)に示すとおり、第一群～第十二群土器に分類した。

以下、土器の群別と土器型式について示すことにする。

☆出土土器の群別と土器型式

- | | |
|---------|-----------------|
| ○第一群土器 | ・前期の土器を一括 |
| ○第二群土器 | ・中期の土器を一括 |
| ○第三群土器 | ・後期、十腰Ⅰ式土器 |
| ○第四群土器 | △後期、十腰内Ⅰ・Ⅱ式中間型式 |
| ○第五群土器 | ・後期、十腰内Ⅱ式土器 |
| ○第六群土器 | ・晚期、大洞B・C式土器 |
| ○第七群土器 | ・晚期、大洞C1式土器 |
| ○第八群土器 | ・晚期 大洞C2式土器 |
| ○第九群土器 | △晚期 大洞C2-A式土器 |
| ○第十群土器 | ・晚期 大洞A式土器 |
| ○第十一群土器 | ・ 土師器 |
| ○第十二群土器 | ・ 須恵器 |

以上が、第六次発掘調査で出土した土器群の群別と型式別分類である。

また、A・P・L1～97には、後期(A・P・L1～18)、晚期(A・P・L19～92)として示してある。

これらの土器群を器形別、型式別に分類すると、つぎに示す(表Ⅳ)のようになる。

すなわち、(表Ⅳ)に示す土器組成を検討すると、第八群土器(大洞C2式)の土器組成が整っていることが理解できる。

なお、個々の土器については、(A・P・L1～97)に記述しているので省略する。

表題

〔観音林遺跡出土、完形・復原土器→器形別・型式別分類表〕

(A・P・L 1~97)

器 形 別 別		鉢 形 土 器	深鉢 形 土 器	壺 形 土 器	小形壺 形 土 器	甕 形 土 器	注 口 土 器	皿 形 土 器	塊 形 土 器	浅 鉢 形 土 器	小形鉢 形 土 器	把手付 鉢 形 土 器	把手付台 鉢 形 土 器	台付 鉢 形 土 器	台付深 鉢 形 土 器	広口 壺 形 土 器	異 形 土 器	四脚付 異形皿 形 土 器	
後 期	第三群	5	2	3	1	1	3										1	16	
	第四群	3	2															5	
計		8	4	3	1	1	3											21	
晚 期	第六群						1	1							2	1		5	
	第七群	2		2			1	2			1	1			3			12	
	第八群	10	7	3		1		1	3	3	1	1		2		2	1	34	
	第九群	1								2				1	1			5	
	第十群	2		2				1		7	2	1	5	2	1			23	
計		15	7	7		1	1	2	4	3	12	4	3	5	7	5	1	1	79

☆〔第四群土器〕（A・P・L1～5）

- ・第四群土器としたものは、A・P・L1～5に示した5箇体、すなわち、鉢形土器（1・2・3）、深鉢形土器（4・5）を復原できた。

また、破片土器（B・P・L1～4→1～56）に示したとおり破片で56に分類した。

第五次発掘調査において、破片のみではあるが既に指敵していたのであるが、第六次発掘調査においては、完形、復原土器が5箇体出土したので、次第に「十腰内Ⅰ式」と「同Ⅱ式」の中間をつなぐ土器群が少しずつ明らかになってきた。

この第四群土器としたものは、やはり「十腰内Ⅰ式」土器群に施文要素は近いものを持っているが、器形的には、異質な形態を有しているものである。

なお個々の土器については、記述してあるので省略する。

☆〔第五群土器〕（B・P・L4-57～72）

- ・この第五群土器とした「十腰内Ⅱ式」土器は、全部で16こ（破片数）の出土である。

完形または復原可能な土器は出土していないが、第二次発掘調査以来出土はあったが、詳しい内容は不明である。破片の分類では、2類に分けられるが、今後の研究に問題を残したいと考える。

☆〔第九群土器〕（A・P・L29・55・59・75・76）

・第九群土器としたものは、5箇体復原したが、この群の土器は、「大洞C2式」と「大洞A式」土器の両者の文様要素をもつものとして筆者が（大洞C2-A式）と、仮称しているものである。

すなわち、「曲線文」と、「入り組工字文」の未完成な施文があるものである。

なお、個々の土器については記述してあるので省略する。

まず最初に、今後も追求して行きたいと考える第四群土器と第九群土器について述べてきた。

つぎに、第一群～第十二群に分類した土器群について述べることにする。これらの土器については、グリットごとに（P・L1～37）として掲げてある。

- ①前期・中期の土器（P・L28-482～486, 487～492）→第一・二群土器

・前期・中期の土器は、すべてが小破片で出土した。その出土状況は、各発掘区にわたって數片ずつ混入する出土状況である。小破片のため、胎土内に纖維が含まれているかどうかで、前・中期の土器を区分した。

また、(P・L 28-487・492)については、それぞれ、円筒上層式土器d類、大木系の中期末の土器ではないかと考えられるが断定は控える。

③後期の土器

- ・後期の土器群のうち、第四群・第五群土器については既述したので省略する。

☆〔十腰内I式土器〕(P・L 1~3→J 1・P・L 18~20→K 2・P・L 28-496~503, P・L 29, P・L 30-530~535→AN 2, P・L 28-493~495→CB F 4)

・十腰内I式土器は、A地区K 2、AN 2地区、C地区Bグリット、等から出土しており、すべてが破片であるが鉢形か深鉢形が多いようである。これらのものは、従来言われてきた「十腰内I式」土器の一般的なものと考えられる。

④晚期の土器(P・L 4~P・L 8→J 1, P・L 9~P・L 15→J 2, P・L 16, P・L 17→K 1, P・L 21~P・L 27, →K 2, P・L 16-266→AN 2→P 10, P・L 30-528→CB-F 4)

・晚期の土器群は、A地区J 1, J 2, K 1, K 2グリットおよびAN 2地区P 10グリット・CB地区F 4グリットから出土しているが、最も多く出土したのは、A地区的J・Kグリットである。他のグリットはごく少数の出土であった。

・これらの晚期の土器群は、完形・復原土器(表Ⅷ)で示したとおり、古い方の上限は第六群とした大洞B・C式土器、下限は第十群とした大洞A式土器で、晚期の大洞B式、大洞A'式土器の出土は、第一~第六次発掘調査をとうして、1片の出土もない。

・したがって、当銀音林遺跡を営んだ人々は、後期十腰内I・II式期、晚期大洞B・C式期~大洞A式期と考えることが可能であろう。

・また、晚期の土器群は、各型式とも精製土器、半精製土器、粗製土器に分けられるが、このことについては、A・P・L 19~97に個々の土器について記述している。

- ・破片土器についても同様に分けられるのであるが省略した。

⑤台付土器台部・底部各種、円盤状土製品(P・L 35-637~645, P・L 35-646~652, P・L 36~653~665, P・L 37~666~684)(685)は三角形土製品。

・台付土器台部としたものは、いずれも晚期のものである。すなわち、台部が無文のもの、台部に施文のあるもの、の二種に分けられる。また、その形態から、器高の高いもの、低いものに分けられるが、さらに細分が可能である。この項では、細分が可能であるとの指摘に止めたい。

・底部各種として掲示した（P・L35-646～651, P・L36-653～659）は後期、P・L36-653～659は後期、（P・L36-660～665）としたものは、晩期の底部である。底部の資料を蓄積しながら分類したいと願うところである。

・円盤状土製品（P・L37-666～684），このうち、（P・L37-666～679）としたものは後期、（P・L37-680～684）は、晩期のものであろう。

このうち、（683・684）は中央に穿孔のあるもので、他は穿孔のないものである。

穿孔のあるものが、完形なのか、無いものが未完なのか、或いは用途機能が異なるのか甚だ疑問とするところである。

⑥土師器・須恵器（P・L33-607・608, P・L34-609～636）

・このうち、（607・608）は土師器、（P・L34-609～636）は須恵器である。

土師器のうち、（608）は塊形で底面に糸切り痕が認められるもので、「東北北部の土師器型式」第二型式である。

・須恵器破片のうち、（609・613・616・617・619・621・622・623・624・627・628）は、長頸（細口）壺の破片と思われる。

また、（610・611・612・614・615・618・620・625）は、須恵器壺形のものであろう。カーブから見ても大形のものらしい。

（626・630）は塊形の破片である。（629）は底部の一部破片と思われる。

破片のため須恵器の器形は不明であるが、第二型式の土師器に伴うものである。

出土地区、グリット、層位等は、P・L33-34に記してあるので省略する。

觀音林遺跡出土・石器・石製品等一覧表〔表2〕

種別	類別	S・P・L.N.	整 理 No.	計 測 値 (cm)	重量 (g)	石 質	出土区・層位	
			通しNo.	器種				
石 鑿	1	1	1	5.12×1.28×0.42	3	珪質頁岩	A地区 J ₂ III	
			2	4.76×0.97×0.52	2	"	K ₂ II	
	2		3	4.07×1.59×0.56	4	"	K ₁ I 上	
			4	柄部Pitch 3.82×1.37×0.64	2	"	AN ₂ 地区 P ₁₁ II	
			5	△ 先端欠 3.74×1.48×0.49	2	"	A地区 K ₂ II	
			6	3.29×1.25×0.48	2	"	AN ₂ 地区 P ₁₀ II	
			7	3.60×1.12×0.42	1	"	" Q ₁₂ II	
			8	3.08×1.07×0.51	1	"	A地区 J ₁ III	
			9	3.84×1.56×0.48	2	めのう	K ₂ II	
			10	柄部Pitch 3.88×1.75×0.74	2	珪質頁岩	J ₂ III	
	3		11	柄部Pitch 2.66×1.42×0.50	2	"	J ₁ III	
			12	2.0×1.46×0.45	2	"	K ₂ II	
			13	△ 先端欠 2.92×1.24×0.47	2	"	K ₂ II 下	
			14	3.08×1.61×0.58	2	"	AN ₂ 地区 O ₁₂ II	
	4		15	4.58×1.49×0.66	3	"	J ₂ III	
			16	3.71×1.18×0.56	2	"	J ₂ III	
			17	3.92×1.34×0.98	2	"	M ₁ II	
	5		18	2.74×1.18×0.40	1	"	K ₁ II	
			19	金屬Pitch 2.81×1.33×0.38	1	めのう	J ₁ III	
	6		20	2.34×1.21×0.46	1	珪質頁岩	J ₁ III	
			21	2.46×1.45×0.45	1	"	J ₁ III	
			22	△ 柄部欠 1.90×1.36×0.54	1	"	J ₂ III	
			23	2.36×1.59×0.28	1	"	J ₁ III	
			24	柄部Pitch 2.28×1.36×0.26	1	"	J ₁ III	
			25	柄部Pitch 1.94×1.45×0.42	1	"	J ₁ III	
			26	Pitch 1.82×1.31×0.26	1	"	J ₂ III	
			27	2.01×1.32×0.34	1	"	J ₂ III	
			28	1.99×1.62×1.31	1	"	J ₂ III	
			29	柄部Pitch 2.34×1.16×0.36	1	"	J ₁ III	

石 錆	10	1	30	30	Pitchあり 4.0×1.82×0.65	3	珪 質 真 岩	AN ₂ 地区 J ₂ III	
			31	31	4.11×1.81×1.16	10	"	K ₁ II 中	
			32	32	4.01×2.02×0.76	7	"	AN ₂ 地区 P _{1,2} II	
			33	33	3.63×1.88×0.67	4	め の う	A _メ 地区 J ₁ III	
			34	34	合 光 遠火 1.82×1.10×0.38	1	珪 質 真 岩	AN ₂ 地区 O _{1,2} II	
			35	35	合 光 遠火 2.19×1.24×1.38	1	め の う	A _メ 地区 J ₂ III	
	12		36	36	合 光 遠火 2.12×1.08×0.36	1	"	J ₂ III	
			37	37	合 先端火 1.90×1.28×0.49	1	珪 質 真 岩	K ₁ II	
			38	38	合 先端火 1.92×1.28×1.0	1	"	J ₂ III	
			39	39	2.42×1.12×0.34	1	め の う	J ₂ III	
			40	40	Pitch 2.66×1.38×0.5	1	珪 質 真 岩	J ₂ III	
			41	41	2.12×1.23×1.21	1	"	J ₁ III	
削 器 (Scraper)	1 横形	2	42	1	5.58×8.50×1.95	50	"	J ₂ II 下	
			43	2	6.40×7.0×1.21	40	"	J ₂ II 下	
			44	3	Pitch 4.93×6.47×1.18	24	"	J ₂ I 中	
			45	4	4.18×5.16×1.11	20	"	J ₁ I 中	
			46	5	Pitch 4.25×4.50×1.04	12	め の う	AN ₂ 地区 P _{1,2} II	
			47	6	Pitch 4.03×4.96×0.58	10	珪 質 真 岩	A _メ 地区 J ₂ III	
			48	7	一端火 合 5.0×5.05×1.30	25	"	J ₂ III	
			49	8	5.87×3.83×1.06	20	"	J ₂ III	
			50	9	4.46×8.86×1.02	40	"	AN ₂ 地区 Q ₁₀ II	
			51	10	3.81×4.46×0.95	18	"	A _メ 地区 J ₁ III	
(有柄) (Scraper)	2 有柄 2	1	52	11	柄部2個つき 4.74×5.85×0.91	28	"	K ₂ III	
			53	12	一端火 合 3.14×2.34×0.99	5	"	J ₂ II	
			54	13	一端火 合 2.98×3.48×1.28	10	め の う	J ₂ II 下	
			55	14	異形 1.35×4.10×0.62	2	"	J ₂ II 下	
	2 楔形	3	56	15	9.69×5.3×1.08	52	珪 質 真 岩	J ₂ III	
			57	16	7.98×4.12×1.0	32	"	K ₁ II	
			58	17	合 一端火 5.55×1.93×0.98	10	"	AN ₂ 地区 P ₁₀ II	
			59	18	合 一端火 3.48×3.26×0.72	10	"	A _メ 地区 K ₁ II	
3 楔形	3	3	60	19	Flake 4.08×3.52×0.61	8	"	J ₁ III	
			61	20	Flake 7.72×3.94×1.56	28	"	K ₁ III	
			62	21	Flake 4.81×3.58×0.76	10	"	K ₂ II	

			63	22	Flake 7.46×3.10×0.90	14	珪質頁岩	A地区 J ₂ III
			64	23	☆Flake一端欠 5.41×3.22×1.54	20	"	AN ₂ 地区 P ₁ , II
			65	24	☆Flake一端欠 5.08×3.75×0.93	20	"	Q ₁ , II
			66	25	Flake 5.86×4.37×1.15	20	"	A地区 K ₁ II
			67	26	5.19×6.86×1.28	30	"	K ₁ II
			68	27	4.52×6.36×1.15	32	"	J ₁ III
			69	28	4.34×7.08×1.82	42	"	AN ₂ 地区 R ₁ , II
			70	29	4.91×6.04×1.56	50	"	P ₁ , II
			71	30	5.90×6.42×1.43	60	"	C地区 F ₅ II
			72	31	3.35×5.93×0.89	25	"	A地区 J ₁ III
			73	32	3.41×4.90×1.32	20	"	AN ₂ 地区 P ₁ , II
			74	33	4.38×3.79×1.37	20	"	A地区 K ₁ III
			75	34	8.61×3.56×0.98	30	"	J ₁ , III
			76	35	9.22×4.38×1.04	40	"	AN ₂ 地区 O ₁ , II
			77	36	4.75×7.08×1.42	58	"	A地区 J ₁ III
			78	37	5.43×4.92×0.99	30	"	K ₁ II
			79	38	5.28×3.76×1.10	30	"	K ₁ II
			80	39	5.10×3.36×1.12	22	"	J ₁ III
			81	40	5.42×2.32×1.22	15	"	J ₁ III
			82	41	4.85×3.23×0.72	10	"	AN ₂ 地区 O ₁ , II
			83	1	4.89×2.66×1.40	20	"	A地区 K ₁ II
			84	2	6.35×1.36×1.39	34	"	J ₁ , II
			85	3	4.85×2.68×1.28	12	"	K ₁ III
			86	4	5.94×2.54×1.24	20	"	J ₁ III
			87	5	7.15×2.90×1.82	32	"	J ₁ III
			88	6	7.26×3.08×1.54	38	黑色珪質頁岩	K ₂ II
			89	7	point ² 4.70×2.38×1.29	10	珪質頁岩	J ₂ III
			90	8	3.73×2.39×1.01	10	"	J ₂ III
			91	9	△下半欠 6.36×3.26×1.22	26	黑色珪質頁岩	AN ₂ 地区 O ₁ , I
			92	10	△下半欠 4.58×2.51×1.41	20	珪質頁岩	P ₁ , II
			93	11	△下半欠 3.32×2.25×0.81	8	黑色珪質頁岩	K ₁ II
			94	12	4.38×1.84×0.68	4	珪質頁岩	J ₂ III
			95	13	△下半欠 4.28×2.36×0.93	10	"	O ₁ , II

	3 実物 欠損品		96	14	Scraper? $5.28 \times 3.56 \times 1.23$	20	珪質頁岩	A地区 J ₁ II	
搔 器 End- Scraper	4 不定形 欠損品	4	97	15	☆上平欠 $2.29 \times 3.14 \times 0.88$	8	"	" J ₂ II	
			98	16	☆上平欠 $2.86 \times 4.24 \times 0.94$	10	流紋岩	" J ₂ II	
			99	17	☆上平欠 $4.0 \times 4.49 \times 1.34$	30	珪質頁岩	AN ₂ 地区 P ₁₀ II	
			100	18	$5.12 \times 3.46 \times 1.35$	22	"	C地区 B-F ₄ II	
	5 未完 または Flake 活用		101	19	$5.92 \times 4.16 \times 1.53$	40	"	A地区 K ₁ II	
			102	20	$5.42 \times 2.67 \times 1.60$	23	"	C地区 B-F ₄ II	
			103	21	$7.72 \times 3.11 \times 1.52$	30	黑色珪質頁岩	AN ₂ 地区 P ₁₀ II	
			104	22	$7.72 \times 3.38 \times 1.98$	52	珪質頁岩	A地区 K ₁ II	
			105	23	$6.62 \times 3.42 \times 1.14$	32	"	AN ₂ 地区 O ₁₀ II	
			106	24	$8.12 \times 6.99 \times 1.12$	110	黑色珪質頁岩	" Q ₁₀ II	
石 槍 Point	1 定形 小形	5	107	1	Scraper? $3.62 \times 2.08 \times 0.85$	10	めのう	AMK J ₂ III	
			108	2	$4.26 \times 2.15 \times 0.94$	10	"	" K ₁ II	
			109	3	$3.72 \times 1.99 \times 0.87$	4	珪質頁岩	" J ₂ III	
			110	4	$4.72 \times 2.75 \times 1.01$	10	"	" J ₂ III	
			111	5	$4.64 \times 2.31 \times 0.92$	10	"	" K ₂ II	
			112	6	$4.04 \times 2.58 \times 0.78$	8	"	" K ₁ I	
			113	7	$4.49 \times 3.13 \times 0.72$	10	"	" K ₁ I	
	2 未完 大形		114	8	☆下平欠 $3.40 \times 2.33 \times 0.86$	4	"	" J ₂ II	
			115	9	$7.88 \times 2.52 \times 1.65$	30	"	" J ₂ III	
			116	10	$7.25 \times 4.16 \times 1.32$	40	"	" K ₁ II	
			117	11	☆下 $5.63 \times 3.01 \times 1.12$	20	"	J ₁ III	
			118	12	$5.26 \times 4.19 \times 0.86$	15	"	" K ₁ I	
			119	13	$4.64 \times 2.42 \times 0.98$	8	めのう	" J ₂ II	
			120	14	$4.16 \times 2.40 \times 2.48$	10	珪質頁岩	AN ₂ 地区 P ₁₀ II	
石 砕 磨 製	3 Flake 活用	5	121	15	$3.08 \times 2.32 \times 0.72$	4	"	A地区 J ₂ III	
			122	16	$3.36 \times 2.38 \times 0.70$	4	"	表探	
			123	17	$4.68 \times 2.08 \times 0.72$	4	"	P ₁₂ II	
			124	18	$4.40 \times 2.15 \times 0.68$	3	"	" K ₁ I	
			125	1	$7.48 \times 3.08 \times 1.24$	50	ホルンフェルス	AN ₂ 地区 P ₁₀ II	
石 砕 磨 製	1 小形	5	126	2	$1.52 \times 2.49 \times 0.99$	20	"	" P ₁₀ II	
			127	3	$3.04 \times 1.59 \times 0.51$	8	"	AMK J ₂ III	
			128	4	$6.49 \times 1.91 \times 1.19$	30	"	" J ₂ III	

石斧 磨製	3 刃部 欠損	5	129	5	上半のみ 3.44×2.89×0.85	20	ホルンフェルス	A地区 K ₁ III	
			130	6	9.89×4.15×2.25	200	石英玢岩	AN ₂ 地区 Q ₁₁ II	
			131	7	全刃欠 9.20×4.06×2.43	150	玢岩	" Q ₁₁ II	
			132	8	全刃欠 9.52×4.26×2.85	200	"	C地区 B-5 II	
			133	9	全刃欠 8.51×4.49×2.91	175	石英玢岩	A地区 J ₁ III	
		6	134	10	全下半欠 5.42×3.35×2.48	65	玢岩	" K ₁ I 上	
	4 刃部 のみ 現存		135	11	全上部のみ 3.05×2.26×2.09	20	"	K ₂ II	
			136	12	全上部のみ 3.42×3.22×2.45	38	"	J ₁ III	
			137	13	全上部のみ 1.68×1.65×0.79	2	ホルンフェルス	K ₁ I 中	
			138	14	全上半欠 8.01×4.08×1.16	70	"	AN ₂ 地区 O ₁₀ II	
打製	5 大型	6	139	15	全下半欠 6.32×4.92×1.60	98	"	A地区 K ₂ I 中	
			140	16	全上半欠 7.12×3.98×2.78	120	千枚岩	J ₁ I 中	
			141	17	5.25×3.92×1.56	60	花崗斑岩	AN ₂ 地区 Q ₁₀ II	
石棒		7	142	18	15.33×6.51×4.51	450	ホルンフェルス	A地区 K ₂ I 下	
			143	19	19.9×9.28×3.96	990	玢岩	AN ₂ 地区 O ₁₂ II	
石刀		7	144	1	全下半欠 13.4×3.28×1.38	90	ホルンフェルス	A地区 J ₁ III	
			145	2	全上下半欠 13.23×2.49×1.82	110	"	J ₂ III	
石鍤	1	7	146	1	全下半欠 12.9×2.85×1.86	150	"	AN ₂ 地区 O ₁₂ II	
			147	2	全上下半欠 8.42×1.76×0.6	20	"	A地区 J ₂ III	
石錐 drill	1 定形	7	148	1	8.19×5.37×2.58	190	花崗閃綠岩	K ₁ I	
			149	1	4.22×2.21×0.98	8	めのう	J ₂ III	
			150	2	3.08×0.98×0.84	2	珪質頁岩	K ₂ II	
			151	3	石頭? 2.52×0.72×0.50	2	"	AN ₂ 地区 Q ₁₁ II	
	2 定形 3 不定形 Flake	7	152	4	先端欠 2.64×0.75×0.55	1	"	A地区 J ₂ III	
			153	5	5.12×2.35×0.42	5	"	AN ₂ 地区 O ₁₀ II	
			154	6	Point? 5.12×2.41×0.69	10	黒色珪質頁岩	A地区 J ₂ III	
			155	7	3.62×1.52×0.22	2	珪質頁岩	" J ₂ III	
石皿	1 欠損品 (大)	8	156	1	欠損品 13.7×12.5×5.48	1.25	安山岩	AN ₂ 地区 P ₁₃ II	
			157	2	欠損品 8.90×20.2×3.25	750	緑色凝灰岩	" P ₁₁ II	
			158	3	朱塗あり(欠損品) 9.42×18.8×3.78	915	珪質頁岩	" O ₁₂ II	
			159	4	小破片 7.40×5.0×5.38	200	安山岩質熔岩	" P ₁₂ II	
	2 欠損品 (小)		160	5	小破片 7.32×5.18×3.18	98	凝灰岩	A地区 K ₁ I	
			161	6	小破片 7.75×5.42×1.96	80	シルト岩	" J ₁ III	

石皿	3 自然石	8	162	7	小破片(石頭狀) $18.5 \times 12.64 \times 2.93$	810	珪質頁岩	AN ₂ 地 J ₁ III
1 不整 円形	9	163 164 165 166 167 168 169 170 171 172 173 174 175 176 177 178 179 180 181 182 183 184 185 186 187 188 189 190 191 192	163	1	$8.68 \times 8.12 \times 2.55$	165	安山岩	AN ₂ 地 P ₁₃ II
			164	2	$6.12 \times 6.72 \times 2.29$	125	流紋岩	AN ₂ 地 J ₁ II
			165	3	$5.96 \times 5.78 \times 1.82$	130	"	K ₁ II
			166	4	$5.95 \times 5.89 \times 2.58$	110	"	J ₂ III
			167	5	$5.57 \times 5.75 \times 2.62$	108	"	J ₁ III
			168	6	$4.28 \times 4.46 \times 2.58$	70	"	J ₁ III
			169	7	$5.0 \times 4.57 \times 1.29$	32	"	J ₁ III
			170	8	$4.74 \times 4.52 \times 1.36$	35	"	J ₁ III
			171	9	$4.55 \times 4.52 \times 1.65$	45	"	J ₂ III
			172	10	$5.0 \times 4.45 \times 1.31$	40	"	J ₂ III
			173	11	$4.18 \times 4.15 \times 0.88$	24	頁岩	AN ₂ 地 Q ₁ II
			174	12	$4.76 \times 4.73 \times 0.98$	30	"	K ₁ I
			175	13	$4.01 \times 3.82 \times 1.28$	22	"	AN ₂ 地 O ₁₂ II
			176	14	$4.51 \times 3.92 \times 0.92$	20	"	O ₁₀ II
円盤状 扁平石器	2 不整 横円形	177 178 179 180 181 182 183 184 185 186	177	15	$8.52 \times 7.39 \times 2.98$	230	"	AN ₂ 地 J ₂ III
			178	16	$6.62 \times 5.64 \times 1.92$	110	"	K ₁ I
			179	17	$5.54 \times 3.95 \times 1.44$	50	"	J ₁ III
			180	18	$5.76 \times 4.78 \times 1.82$	60	"	J ₁ III
			181	19	$5.80 \times 4.86 \times 1.12$	40	"	AN ₂ 地 O ₁₂ II
			182	20	$5.65 \times 5.80 \times 2.50$	70	"	O ₁₀ II
			183	21	$6.29 \times 4.72 \times 1.66$	60	"	O ₁₂ II
			184	22	$5.45 \times 4.82 \times 1.62$	55	"	AN ₂ 地 K ₂ III
			185	23	$5.72 \times 4.85 \times 1.87$	50	"	K ₂ II
			186	24	$6.0 \times 5.32 \times 1.38$	70	"	AN ₂ 地 O ₁₂ II
3 不整 四辺形	10	187 188 189 190 191 192	187	25	$6.02 \times 5.29 \times 1.68$	90	流紋岩	P ₁₃ II
			188	26	$5.92 \times 6.02 \times 1.49$	70	頁岩	A地 J ₁ III
			189	27	$5.43 \times 4.83 \times 1.08$	50	流紋岩	AN ₂ 地 O ₁₀ II
			190	28	$6.16 \times 6.34 \times 1.86$	122	"	AN ₂ 地 K ₁ II
			191	29	$7.38 \times 7.35 \times 1.76$	90	"	AN ₂ 地 P ₁₃ II
			192	30	$7.86 \times 7.28 \times 2.36$	200	"	O ₁₂ II
			193	31	$10.91 \times 9.08 \times 2.21$	320	"	P ₁₁ II
4 不定形 その1		194	32	$9.79 \times 9.98 \times 2.16$	230	"	O ₁₁ II	

円盤状 扁平石器	4 不定形 そのⅠ	10	195	33	$8.45 \times 7.09 \times 3.06$	210	珪質頁岩	A地図 J ₁ III	
			196	34	$7.16 \times 6.96 \times 2.10$	130	流紋岩	J ₁ III	
			197	35	$9.0 \times 5.59 \times 1.92$	115	"	AN ₂ 地図 P _{1,2} II	
			198	36	$4.02 \times 4.01 \times 1.18$	38	めのう	O _{1,2} II	
			199	37	$6.78 \times 4.86 \times 2.02$	90	"	A地図 J ₂ II	
	5 不定形 そのⅡ		200	38	$5.19 \times 5.22 \times 1.67$	70	"	J ₂ III	
			201	39	$7.16 \times 7.36 \times 2.28$	148	流紋岩	AN ₂ 地図 X ₂ I	
			202	40	$8.08 \times 6.65 \times 1.65$	112	"	A地図 J ₂ II	
			203	41	$5.22 \times 6.50 \times 1.46$	60	"	AN ₂ 地図 O _{1,2} II	
			204	42	$5.88 \times 5.62 \times 1.54$	70	"	A地図 K ₁ , I 中	
タキ石	1 円形 または 球形	10	205	43	$5.43 \times 5.02 \times 1.10$	34	頁岩	J ₁ III	
			206	1	半底あり、中底あり $9.01 \times 8.56 \times 4.30$	500	流紋岩	A地図 K ₁ , I 中	
			207	2	半底あり、中底あり $8.8 \times 7.59 \times 5.25$	520	安山岩	J ₁ III	
			208	3	半底あり $8.96 \times 7.12 \times 2.91$	275	"	J ₁ III	
			209	4	半底あり $8.35 \times 6.89 \times 3.46$	310	花崗閃緑岩	K ₂ , I 中	
			210	5	印底あり $6.01 \times 5.18 \times 2.17$	105	"	AN ₂ 地図 O _{1,2} II	
	2 長円形	11	211	6	印底あり $8.22 \times 5.35 \times 2.47$	70	"	A地図 K ₁ , I	
			212	7	印底あり、整形底あり $12.05 \times 7.74 \times 2.38$	360	花崗斑岩	K ₂ II	
			213	8	印底あり $8.85 \times 5.12 \times 3.37$	232	花崗閃緑岩	C地図 B-F ₂ II	
			214	9	印底あり $11.24 \times 7.98 \times 3.71$	510	"	AN ₂ 地図 P _{1,2} II	
			215	10	女房長-印底あり(下) $9.75 \times 11.12 \times 4.82$	730	"	A地図 K ₂ II	
クボミ石	3 細長形	11	216	11	半底 $6.45 \times 5.85 \times 3.28$	210	"	AN ₂ 地図 P _{1,2} II	
			217	12	半底 $14.55 \times 5.85 \times 2.82$	390	流紋岩	A地図 J ₁ II	
			218	13	半底(石底?) $7.32 \times 11.0 \times 3.78$	485	安山岩	K ₁ , II	
	4 細長 不定形	12	219	14	光端堅底あり $19.8 \times 6.75 \times 4.40$	400	シルト岩	J ₁ III	
			220	15	印底あり $23.7 \times 6.15 \times 5.92$	900	流紋岩	J ₁ , II	
			221	16	半底あり $6.96 \times 5.38 \times 4.10$	262	安山岩	AN ₂ 地図 O _{1,2} II	
			222	1	$9.58 \times 8.95 \times 7.36$	830	角閃石安山岩	P _{1,2} II	
クボミ石	2 横円形	12	223	2	内一節 $11.64 \times 7.85 \times 5.71$	490	泥岩	K ₁ , I	
			224	3	$10.51 \times 5.98 \times 5.32$	390	珪質頁岩	J ₁ II	
			225	4	少粒 $7.06 \times 4.41 \times 2.36$	60	泥岩	J ₁ II	
	3 細長形	12	226	5	$13.16 \times 5.36 \times 3.42$	220	流紋岩	J ₁ II	
			227	6	$13.15 \times 5.46 \times 3.24$	300	珪質頁岩	J ₂ II	

クボミ石	3 細長形	12	228	7	11.66×5.42×3.65	232	珪質頁岩	AN ₂ 区 J ₁ II	
			229	8	7.12×9.06×3.30	60	凝灰岩	J ₁ III	
			230	9	7.81×5.55×3.62	100	緑色凝灰岩	J ₂ III	
			231	10	10.05×7.12×3.69	190	泥岩	J ₁ III	
	不定形	13	232	11	12.5×8.45×5.30	340	"	J ₁ II	
			233	12	10.65×5.70×3.28	145	"	AN ₂ 地区 X ₂ I	
			234	13	12.05×7.15×7.15	600	流紋岩	AN ₂ 区 J ₁ III	
			235	1	3.78×3.81×3.87	90	めのう	J ₁ II	
石彈 or 石彈状 石製品	1 球形	13	236	2	4.59×4.40×3.93	115	"	AN ₂ 地区 X ₂ I	
			237	3	5.85×5.94×5.58	130	泥岩	AN ₂ 区 K ₁ I	
	2 不定形		238	4	5.38×5.36×4.46	138	"	J ₁ III	
			239	1	4.58×3.83×0.82	20	頁岩	K ₁ I 中	
磨痕 ある扁 平石器	1 表面・側 辺に磨 痕の あるもの	13	240	2	4.29×2.62×0.92	20	流紋岩	J ₁ III	
			241	3	5.15×3.16×0.98	25	珪質頁岩	J ₁ III	
			242	4	5.19×3.04×1.08	30	流紋岩	AN ₂ 区 P ₁ II	
			243	5	6.53×4.29×1.49	60	頁岩	AN ₂ 区 J ₂ III	
			244	6	7.46×5.98×1.40	98	細粒砂岩	AN ₂ 地区 Q ₁ II	
			245	7	8.85×5.62×1.34	124	頁岩	AN ₂ 区 J ₁ II	
			246	8	朱ぬり板 8.22×4.26×1.51	70	流紋岩	J ₁ II	
			247	9	9.75×5.55×1.98	100	"	K ₁ I	
			248	10	大形 14.65×7.84×2.92	530	石英安山岩	K ₁ I 中	
	2 表面 欠損	14	249	11	半欠 6.96×5.28×1.36	102	安山岩	AN ₂ 地区 O ₁ II	
			250	12	半欠 4.60×5.50×1.68	70	珪質頁岩	AN ₂ 区 J ₁ II	
			251	13	9.31×3.95×0.99	70	流紋岩	K ₂ I 下	
擦痕 ある細 長石器	3 表面・側 辺に磨 痕と欠 きのある もの	14	252	14	7.39×5.63×0.62	108	黒曜石	J ₂ II	
			253	15	8.11×6.74×1.74	60	安山岩	AN ₂ 地区 O ₁ II	
			254	16	欠損 5.49×1.76×1.02	20	珪質頁岩	AN ₂ 区 K ₁ I	
			255	17	5.50×2.91×2.24	52	黑色珪質頁岩	K ₁ I	
方形石器		14	256	18	7.05×2.64×1.76	55	流紋岩	AN ₂ 地区 O ₁ III	
			257	1	といし 14.3×14.1×2.36	712	凝灰岩	J ₁ II	
			258	2	9.75×8.08×1.96	200	泥岩	AN ₂ 地区 D ₁ II 下	
三角形 蛇紋石器	1 定形	14	259	1	12.72×11.1×3.26	490	珪質頁岩	C地区 F ₃ II	
			260	1	7.20×4.86×1.17	22	泥岩	AN ₂ 地区 P ₁ II	

三角形 石 等	1 定形	14	261	2	6.17×6.92×1.73	70	流 紋 岩	AN _s 地区 O _{1.0} II
	2 不定形		262	3	8.34×6.82×1.15	84	頁 岩	A 地区 J ₁ , II
小 玉	1 赤色塗 料をぬ るもの	15	263	1			泥 岩	K ₂ II
	2 穿孔のあ るもの		264	2			"	K ₂ II
	3 青緑しな い穿孔の もの		265	3			"	K ₂ II
	2		266	4			綠色凝灰岩	K ₂ II
	3		267	5			"	J ₂ II
	4		268	6	欠損品		"	J ₁ III
	5		269	7			"	J ₂ III
	6		270	1	盾形板状		泥 岩	AN _s 地区 P _{1.0} II (土坑内)
	7		271	2			凝灰岩	A 地区 J ₁ III
縁刻石	1 後期	15	272	3	柱状形		"	J ₁ III
	2 晚期		273	1	三角形板状		"	AN _s 地区 P _{1.0} II
	3 後期		274	2	板状欠損品 (岩偶肩部片)		"	A 地区 J ₂ III
	4 晚期		275	1	9.67×6.31×3.69	64	浮 石	K ₁ I 中
鯖 石 製 品	1	16	276	2	△平欠 6.43×5.99×2.22	30	"	J ₂ III
	2		277	3	△平欠 4.71×6.56×1.84	20	"	K ₁ I
	3		278	4	(円形) 6.62×7.01×1.61	24	"	J ₁ III
	4		279	1	12.0×7.5×1.8		泥 岩	K ₁ II

◎石製品（表Ⅱ、S・P・L14～16）

・石製品として出土したものは、つぎのとおりである。

1. 岩偶（表Ⅱ-274・279）、2. 岩偶肩部片（274）
3. 三角形石製品（表Ⅱ-273、260・261・262、S・P・L14-260～262）
4. 線刻石（表Ⅱ-270・271・272、S・P・L15）
5. 小玉類（表Ⅱ-263～269、S・P・L15）

以上、・岩偶2、・三角形石製品4、・線刻石3、・小玉類7、の16点である。

・このうち、岩偶は晩期大洞C1、C2式、三角形石製品は、後期十腰内I式（273）不明（260、261・262）であるが、（260・261）は十腰内I式期、（262）は晩期と推定される。このことは、出土地点を考慮に入れたものであるが断定は控える。

・線刻石、（270）は、後期十腰内I式土器片とともに土壤内から出土した。（土壤N.9→第10図）、（271・272）は、円錐と橢円板状石片で一応晩期のものと考えられる。

これらの石製品の出土地区・層位、岩質については（表Ⅱ）を参照されたい。

④石器（S・P・L1～16・表Ⅱ）

・第六次発掘調査で出土した石器数は、軽石製品を除くと、総計259点である。これらの石器類は、石製品を含めて、後期・晩期にわたるものである。

さきに層序の項で述べたとおり、二次堆積層のため最も多く遺物が出土したA地区においても、後期・晩期の土器が出土しており、また他の地区においても同様で、後期・晩期の区別は不可能であった。以下に示す石器類は、この両時期にわたるものである。

出土した259点の石器を器種別に分けると、つぎのとおりである。

1. 石 鋸	41,	15.8%	2. 削 器	41,	15.8%	3. 挖 器	24	9.2%
4. 石 槍	18,	6.9%	5. 石 斧	19,	7.3%	6. 石 棒	2	
7. 石 刀	2,		8. 石 錘	7,		9. 石 錐	7	
10. 石 盆	7,		11. 円盤状 扁平石器	43,	16.6%	12. タタキ石	16	6.1%
13. クボミ石	13,	4.3%	14. 石弾または 石弾状石器	4,		15. 磨痕のある 扁平石器	18	6.9%
16. 方形石器	2,		17. 三 角 形 鉈状石器	1,				

以上の17器種である。これらのうち、数の多いものについて出土石器259点に対する%を求めるに、既述のようになる。

・すなわち、円盤状扁平石器、石鎌、削器、搔器、磨痕のある扁平石器、石斧、タタキ石等の比率が高いことがわかる。

このことから、狩漁用具、調理用具の比率が高いことが考えられる。

さらに軽石製品（表Ⅱ）を加えると狩漁用具がぎわめて多いことが、一層理解できると思う。

・つぎに、石器に使用された岩質を調べると、つぎのように分類される。

①珪質頁岩	128	49.4%	②流紋岩	34	13.1%
③頁岩	19	7.3%	④めのう	18	6.9%
⑥ホルンフェルス	13	5.0%	⑥花崗閃綠岩	8	3.0%
⑦安山岩	8	3.0%	⑧泥岩	8	3.0%
⑩玢岩	6	2.3%	⑩凝灰岩	3	1.1%
⑪花崗斑岩	2		⑫石英玢岩	2	
⑬緑色凝灰岩	2		⑭シルト岩	2	
⑮千枚岩	1		⑯石英安山岩	1	
⑰安山岩質熔岩	1		⑰角閃石安山岩	1	
⑲細粒砂岩	1		⑳黒曜岩	1	

以上の20岩質に分けられる。これらの岩質別数について石器総数に対する比率を求めるに、既述のようになる。

・すなわち、珪質頁岩が最も大きい比率を示すのである。また比率の大きいものから順に列記すると、

①珪質頁岩、②流紋岩、③頁岩、④めのう、⑥ホルンフェルス等となっている。

ここで注目したいのは、めのうとホルンフェルスである。

当遺跡におけるめのう製石器の比率が大きいことが特徴の一つとなろう。

また、流紋岩の比率が大きいのは、円盤状扁平石器が流紋岩製であることに起因するようである。

縄文人は、石器の機能に応じた岩質を選定していたものと考えられる。

出土した石器については、出土地区、グリット、層位、および計測値等について、（表Ⅰ）に記してある。

鑑定者 金子 浩昌

1987.07.17 - 08.02 観音林遺跡（第六次）出土、骨類鑑定表 (表III)

資料 No.	出土区、層	記 録	出土状況等
1	J1 - III下	小骨細片。 獸骨片と魚骨の鱗片かと思われる小片。	木炭混入黒土 (散布)
2	J1・J2 III下 (ベルト下)	鳥骨細片。	大洞C2式鉢形土器内(斜位)
3	J1 - I	小骨片少量 鳥骨片も含む。	十腰内I式壺形土器内 (二次堆積ローム)
4	J1 - II	ネズミザメ歯、下顎前歯、歯冠高 22.2 呪術的な意味から内隣にはこぼれたものであろう。	木炭混入黒土 (ロームや、混入)
5	J1 - III下	大型獸骨片 鳥類肋骨片、その他1	木炭混入黒土 (散布)
6	J1 - II中	大型獸骨片 頭蓋の一部と思われる首片が1個	土器・木炭混入黒土 (散布)
7	J2 - III下	鳥骨片などを含む小骨片少量。	土器・木炭混入黒土 (散布)
8	J2 - III下	大型獸骨片。 鳥骨片が細片となって含まれる。趾骨1、その他中小型の鳥である。	土器・木炭混入黒土 (中央部散布)
9	J2 - III下	骨片が多いが、すべて細骨片で、種名などの判別できるものはない。大部分は大型獣、イノシシ、シカであろう。 鳥骨も細片となって含まれる。	土器・木炭混入黒土 (中央部散布)
10	J2 - III	大部分はイノシシ、シカなど大型獣の骨片である。 シカの下顎臼歯が細片となって含まれていた。 中型獣：中足骨近位端の破片1、その他 鳥骨片があり、膝骨の近位端片1、その他骨片がある。	土器・木炭混入黒土 (中央部散布)
11	J2 - III	大型獣：イノシシ下顎骨片1、その他四肢骨片1。 中型獣：タヌキ位の中足骨遠位端片1、肋骨片数点。 鳥骨片と思われる小断片。	土器・木炭混入黒土 (中央部散布)
12	J1・J2 III下 (ベルト付)	大型獸骨片が主。 中型獣の大顎骨遠位端1。 鳥骨細片も多く、鳥口骨片、趾骨片その他があり、いずれも小さい鳥。	土器・木炭混入黒土 (中央部散布)
13	AN2 O10 II	微細小骨片のみ。 中小の獣もしくは鳥骨片。	大洞A式台付鉢形土器内

資料 No.	出土区、層	記 録	出土状況等
14	AN 2 O12 Ⅱ	細骨片のみ。 僅かに鳥骨片なども含むらしい。	ローム直上Ⅲ層 (散布)
15	AN 2 O12 Ⅱ	大型獸骨片2。 中型獸骨片2~3。	ローム、焼土混入 褐色土点在
備 考		No. 7~12は、J 2 グリット(東西4m×南北3m)のⅢ層中央部 に2×2m範囲にまとまって散布。No. 1~6は点在、No. 13~15 は、やはり点在散布(13)を除く。	

観音林遺跡出土 骨類鑑定表(追加)

資料 No.	記 録
C 2 式壺形内 J 2-16 Ⅲ	テン 左肩甲骨関節窓
C 2 式注口土器内 J 2-17 Ⅲ	鹿角の小断片1
C 2 式鉢形土器内 J 2-18 Ⅱ	微小断片のみ。鳥骨か?
備 考	No. 1~15と同じ

これまでの資料と同様に、焼けた骨片が多かったのですが、中小獸あるいは鳥骨片が少なからず含まれていたのに興味が引かれました。小片のために種を同定するには至りませんが、あるいは今後さらによい資料が得られて、明らかにすることができるかも知れません。

金子 浩昌

⑥骨類（表Ⅱ）

・今回の発掘調査において、A地区J1、J2グリット・およびAN2地区O10、O12の各グリットより微少骨類の出土があった。

これらの出土骨類について、早稲田大学金子浩昌氏に鑑定を依頼し、その結果をいただいたのが（表Ⅱ）である。

・（表Ⅱ）のNo.2は大洞C2式土器内、No.3は十腰内I式土器内、No.13は大洞A式台付土器内から検出したものである。

またA・P・L57に掲示した「小形・浅鉢形土器」の上面からも検出したが、展示用資料とする必要から（表Ⅱ）には入れていない。

他の骨類については、（表Ⅱ）に示した出土状況どおりの検出状況である。また骨類を検出した土器は大洞C2式、大洞A式、十腰内I式土器で、土器型式から考えると時差があるものと理解することができる。

これらの出土層位は、A地区的Ⅱ・Ⅲ層、AN2地区（第5図①参照）のⅡ層出土であるため、二次堆積層であることを考慮に入れても、検出状況から時差を認め得る。

・また出土した骨類は、魚骨・鳥骨・獸骨片であって、つぎのように（表Ⅱ）に示されている。それを列記すれば次のとおりである。

-
- ①魚骨 ②鳥骨 ③大型獸（イノシシ・シカ）、④中型獸（タヌキぐらいのもの）
⑤テン ⑥ネズミザメ
-

出土骨片が微小なため同定がむずかしいものであるが、これらの骨類は、焼けた骨片が多いとされている。

・第六次発掘調査で出土した骨類は、既述のとおりであるが、第二～第五次発掘調査までに得た骨類は次のとおりである。参考までに掲げることにする。

-
- ①シカ ②イノシシ ③イヌ ④タヌキ ⑤キツネ ⑥イルカ ⑦アシカ ⑧ノウサギ
-

等々である。今回の資料で、魚骨・ネズミザメ・テンが加わった。

発掘回数が進むにつれて、少しづつではあるが動物相が明らかになることは喜ばしいと

ころである。

第二～第六次調査にわたって一貫して金子浩昌氏に鑑定の労をとっていただいている。
心から感謝申上げる次第である。

鑑定者 木村 啓

1987-07-17 ~ 08-02		観音林遺跡(第6次)出土、植物遺存体鑑定表 (表IV)					
資料 No.	記	録					
I J2-III下	Quercus crispula Blume	ミズナラ(ブナ科)	の果皮				
II J2-III	Fagus crenata Blume	ブナノキ(ブナ科)	の穀斗				
III J1・J2 III	Jugans mandshurica Maxim Var. Sieboldiana Makino.	オニグルミ(クルミ科)	の核皮				
〔記		事〕					
I. については、果皮の厚さと曲面、及び大きさ形態により、 ミズナラと同定した。							
II. については、穀斗の小突起多数あること、曲面、大きさ、形態により、 ブナノキと同定した。							
III. については、核皮の内部の模様と厚さ、大きさ、形態により、 オニグルミと同定した。							
1987.11.6 木村 啓							

⑦植物遺存体（表Ⅳ・岩質参考資料No.3）

・第六次発掘調査において、A地区J2グリット、J1グリットのⅢ層より植物遺存体を検出した。この遺存体について、日本植物学会々員木村 啓氏に同定を依頼した。その結果について同氏よりいただいたのが（表Ⅳ）である。

検出資料は、I・II・IIIであるが、同定された植物遺存体は、（表Ⅳ）に記されたとおりである。

・すなわち、①ミズナラ果皮、②ブナノキの穀斗、③オニグルミの核皮、である。

・また、第五次発掘調査においては、①オニグルミ、トチノキ等の核果・種子表皮等が出士している。

これらについても一貫して木村 啓氏に同定を依頼した。心から感謝申上げる次第である。

⑧鉄製品（岩質参考資料No.3-A・B・C、表V）

この鉄製品A・B・Cとしたものは、それぞれAN2地区P10Ⅱ、O10Ⅱ、およびA地区J1Ⅱ層出土である。

これらの鉄製品については、その器形・成分等不明であるため、後日分析の結果を述べることにする。

⑨岩質参考資料（No.1～3、表V）

・この岩質参考資料とした（1～48・49）は当遺跡において第一次以来第六次にわたって共通的に出土するものを第六次分として掲げたものである。

このうち、（44）としたものは、第五次発掘調査で出土した自然石のプレパラートを作り観察した結果、当地方では珍らしい「石英白雲母ホルンフェルス」であることがわかつたので特に記すこととした。

他のものについては、（表V-No.1～3）を参照されたい。

遺跡出土・石器・石製品等一覧表

〔表3〕

種別	類別	P・L, N.	整理N. 通しN. 器種	計測値 cm (長径×最大幅×器厚)	重量 (g)	石質	出土区・層位
綠色石	1		1	1		碧玉	A地区 K2 II
			2	2		タ	J1 III
			3	3		タ	J1 II
			4	4		タ	K2 II
			5	5		タ	K1 中
			6	6		タ	J2 II
			7	7		タ	J1 III
			8	8		緑色凝灰岩	J1 III
			9	9		碧玉	J1 II
			10	10		タ	K2 I 中
			11	11		タ	AN2 地区 J1 II
	2		12	1		緑色凝灰岩	A地区 K2 I 下
			13	2		タ	J1 II
			14	3		タ	J2 III
			15	4		タ	J2 II
			16	5		碧玉	K2 II
			17	6		タ	J2 III
			18	7		タ	K2 II
			19	8		緑色凝灰岩	K1 中
			20	9		碧玉	J2 II
			21	10		緑色凝灰岩	J1 III
			22	11		タ	J2 III
			23	12		碧玉	J2 II
黒曜石			24	1		黒曜岩	AN2 地区 P10 I
			25	2		タ	J1 I 中
			26	3		タ	J1 III
			27	4		タ	J2 III
			28	5		タ	J2 III
			29	6		タ	J2 III

			30	1		めのう	A地区 J1
			31	2		玉髓	J2
			32	3		タ	K2
			33	4		タ	J2
			34	5		めのう	J2
			35	1	剥離痕あり	鉄石英	J2
			36	2		タ	J2
			37	3		タ	J1
			38	4		タ	J2
			39	5		タ	J1
			40	6		タ	J2
	自然石		41	1		ホルンフェルス	タ J1
	石核 (core)		42	1		黒色珪質頁岩	タ K1
			43	2		流紋岩	タ J2
	S61第5 次出土自 然石		44	1 a		石英白雲母 ホルンフェルス	タ J2
			45	1 b		タ	タ
	自然石に 穿孔のあ るもの		46	1			タ J2
			47	2		泥岩	タ K2
			48	3		タ	タ K1
	鉛石 (黒鉛)		49	1	第五次 J2 II 出土		
				A	細長片 14.76 × 3.29		AN2地区 P10
				B	方形破片 3.59 × 3.0 × 0.68		AN2地区 O10
				C	方形破片 5.19 × 4.78 × 1.89		A地区 J1
	鉄製品			I			A地区 J2
				II			タ タ
				III			タ タ

〔V〕 考 察

(1) 観音林遺跡の層序について（第5・6図）

- ・まず最初にA地区の層序について考えることにする。

A地区の層序は、第5図-⑨に示したように、黒土層と段丘構成層に大きく分けられる。この段丘構成層は遺物を含まないので除外して、Ⅰ～Ⅳ層は、いずれも黒土層である。しかし、この黒土層は混合層であって、各層の特徴については、(1)層序の項で既述したとおりである。

すなわち混合層をなすこととは、正常な堆積層ではなく、二次堆積であることを示している。そのことは、遺物の出土状況からも裏付けられるところである。

- ・また、C地区基本層序を見るとわかるように、原黒土層は、Ⅲ層となっており、Ⅰ層表土、Ⅱ層黒色土のつぎにⅢ層が所在する。

また、第7図AN2-P10～13東壁セクション図でわかるとおり、原黒土層はない。

以上の層序の比較検討から、遺物包含層である原黒土層が削平されたものと考えることが可能である。

すなわち、当遺跡の各発掘区は、原黒土層が削平され、その後、Ⅲ層とした黒土層が堆積したものと考えられる。

- ・A地区の斜面構成層は、原黒土層が削平され、斜面に二次堆積したために混合層を形成したものと考えるのが妥当であろう。
- ・また、AN2地区に、Ⅲ層を欠き、C地区のⅢ層が極めて厚いことは、台地中央部のⅢ層（原黒土）が削平され、北に向って緩斜面をなす地形に、二次的に堆積したものと考えられる。

(2) 遺構について

・検出した遺構は、AN2地区で既述した土壙群、ピット群、カマド址、住居址が検出された。

このうち、住居址には、新・旧があり、ピット群に新・旧を認める。また、これも既に述べたとおり、カマド址も、Ⅲ層、Ⅳ層、Ⅴ層上で検出しておらず、2～3時期に遺構を再編する必要があると考えている。

- ・このことは、第五次発掘調査で検出した、C地区AグリットV層上面の1号住居址、C地区BグリットV層上面の2号住居址とも、二度にわたって貼り付け粘土(床面)が修復されている点等からも考えられるところである。
- ・また、A地区J・Kグリットは、未だ約3m程の包含層が残っていることは既述した。これ程の包含層が所在するが、縄文期特に晩期の住居址が未だ検出されない点に疑問が残るところである。

(3) 出土遺物について

- ・出土した遺物は、土器・土製品・石器・石製品・骨類・植物遺存体・鉄製品・軽石製品・小玉類等々である。

これらのすべてについて述べる紙数がないので、重要と考える若干について述べる。

(4) 後期第四群土器について

- ・第四群土器としたものは、(B・P・L 1~4)に示したが、これらの土器群は、その器形、施文等から、後期「十腰内I式」土器とすることはできないと考える。このことについては、第五次発掘調査の報告書においても記したのであるが、今回、復原土器を得たので再度述べる。

この第四群とした土器の器形・施文を検討すると、「十腰内I式」の施文要素は残っているが異質な要素も強くもっている。

すなわち、「十腰内I式」に近いが、別型式のものとして捉えることが妥当と考える。当遺跡では、「十腰内I式」土器も出土しているが、このものの仲間とも異質である。したがって「十腰内I式」と「同I式」の中間型式と考えるのが妥当であろう。

(5) 晩期第九群土器について

- ・この九群とした土器も、その特徴(施文)から、「大洞C2式」と「同A式」の中間型式として「大洞C2~A式」と言う仮称を与えてきたのであるが、第六次発掘調査で再び出土している。元来「大洞C2式」土器を新・旧、または、1・2に分けられると言う意見は承知していたのであるが、施文の構成に視点をおいても、「大洞C2式」と「大洞A式」の要素をもつ土器群が明らかに存在する。

筆者は「大洞C 2-A式」の仮称を与えているのである。

(☆註、第四群・第九群土器の個々については、(A・P・L 1~5, B・P・L 1~4)
(A・P・L-29・55・59・75・76) を参照されたい。)

(6) 石器について

今回の発掘において出土した石器は、総計259点である。これらの石器の岩質を調べると珪質頁岩・頁岩合わせて56.3%を占めている。また流紋岩が13%、ホルンフェルス5%、めのう6.9%の比率である。

珪質頁岩、頁岩が多いのは、どの遺跡でも共通であろうが、めのうが多い点が当遺跡の特色と考えられる。

また、流紋岩が多いのは、円盤状扁平石器が多いのに起因するが、この石器の用途、機能は不明である。今後も追求したいと考えるところである。(紙数の都合で、他は割合したい。)

☆第六次発掘調査で、本格的調査の三年計画の二年目は終了した。本格的調査の三年目で、土壘と空堀に囲まれた館址内の調査は、ほぼ終了する計画であったが、A地区の包含層が深く、また、遺構の検出も多い。第二期発掘計画では、空堀の外周を調査する計画であるが多少予定より遅れそうである。

観音林遺跡の全体像を明らかにし、当市の文化的価値が高い遺跡に少しでも科学的メスを加え研究したいと願う。関係各位の御厚意に感謝申上げる次第である。

1988・3・20 (新谷記)

☆ 参考文献

- ① ① 観音林遺跡 五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書
第3・7~11集 五所川原市教育委員会
- ②五月女泡遺跡 (1983) 市浦村教育委員会
- ③石器時代の日本 (1960) 芹沢長介 築地書館
- ④亀ヶ岡式土器 (1983) 村越潔 ニューサイエンス社
- ⑤亀ヶ岡遺跡発掘調査報告書 (1974) 青森県教育委員会
- ⑥今津遺跡 (1985) 青森県教育委員会
- ⑦白坂 (1983) 北海道松前町教育委員会
- ⑧岩木山 (1968) 村越潔編 岩木山刊行会

☆〔1・2・3〕→錐状土器〔後期〕

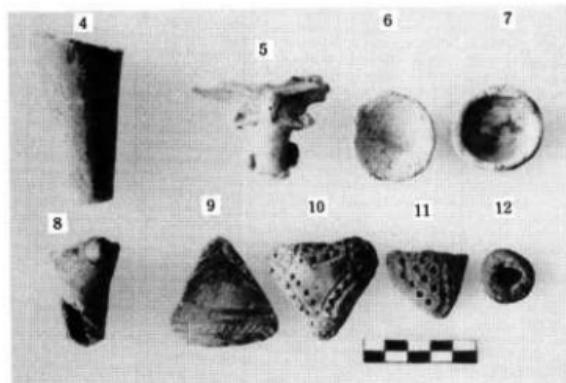


〔K 1 II 中〕

〔J 1 III〕

〔J 1 III〕

〔J 2 III〕



☆〔4・5・8〕→注口土器

☆〔6・7・12〕→袖珍土器

☆〔9・10・11〕→三角形
土製品

〔P 10 III〕

〔K 2 II〕

〔C・B・F 3 III〕

〔J 1 III〕

〔C・B・E 2 III〕

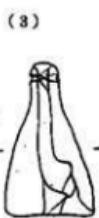
〔R 10 III〕

〔R 10 IV〕

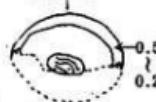
☆〔13・14・15・16〕→土偶脚部
〔後期〕



- 4.3 -



- 4.7 -

0.7
0.2

(1)

4.8



- 3.0 -

0.5
0.2

0.8



- 4.9 -



4.5

(11)



3.7

3.0
← 現存

1



〔K 2 I〕

2

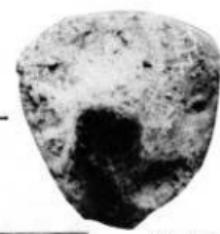


〔J 1 II〕

3 a



3 b



〔J 1 II〕

4 a



4 b



〔K 1 III〕

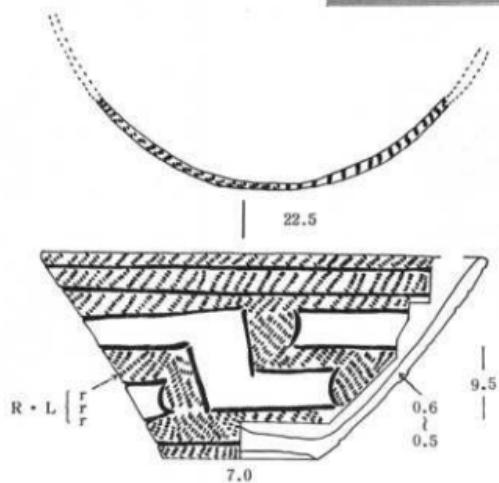
- ☆〔①→中期、板状土偶〕
- ☆〔②→後期、十腰内I式〕
- ☆〔③→晩期、大洞A式〕
- ☆〔④→タタ、大洞A式〕

(アスファルトを)
詰めている。

〔鉢形土器〕 - 1

〔K₂ II〕(現存 $\frac{1}{4}$ 、 図上復原)

1



〔鉢形土器〕 - 1

- ☆ ここに掲げたものは、A 地区 K₂ グリット II 層出土の第四群土器である。
- このものの器形は、平縁で底部から口縁にかけて外反氣味に開く器形で、底面は上げ底を呈するものである。
 - 施文は、胴部に沈線による区画文を持ち、その外側は縄文が施文される。また、このものの口唇部にも縄文の施文がある。
 - 色調は、外面黄褐色、内面は灰黒色一部黄褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。

〔後期の土器〕

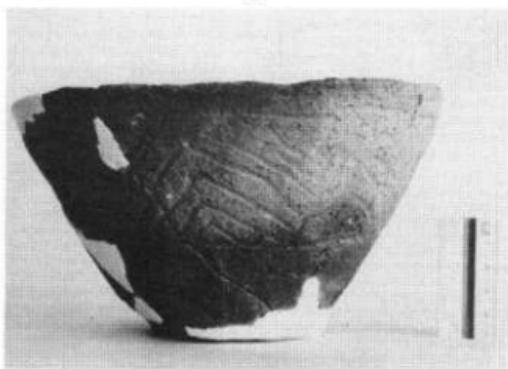
A · P · L 2

〔鉢形土器〕 - 2

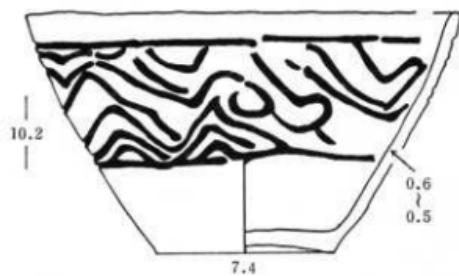
(K₁ II)

(現存 $\frac{1}{3}$ — 図上復原)

2



18.4



〔鉢形土器〕 - 2

☆ このものは、K₁ グリットⅡ層出土の第四群土器である。

- ・ このものの器形も(1)と同様、底部より口縁にかけて、外反氣味に開く器形で底面は、上ヶ底である。
- ・ このものの施文は、やや不整な重山形文が施文されている。この重山形文は、「十腰内Ⅰ式」土器の施文パターンの一つが発展したもののように認められる。
- ・ 色調は、外面赤褐色、一部黒色、内面灰赤褐色、胎土には砂粒を含むが焼成良く堅緻である。

〔鉢形土器〕 - 3

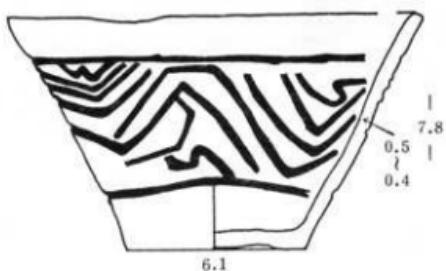
〔J 1 III〕

(完成品)

3



14.4



〔鉢形土器〕 - 3

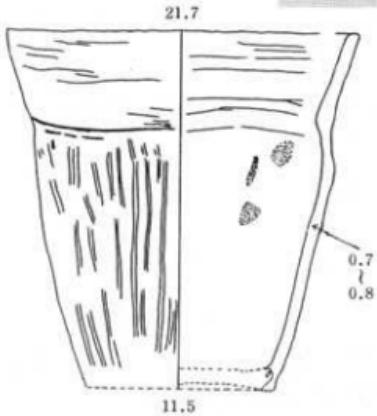
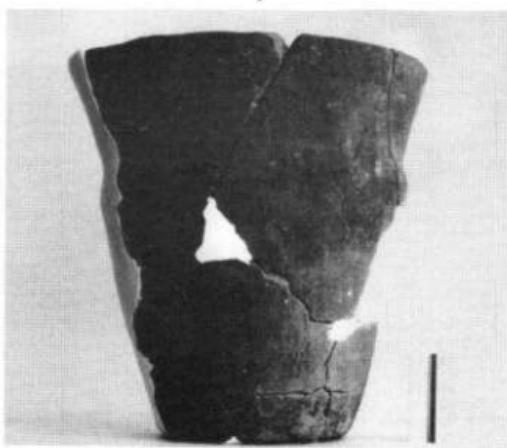
☆ ここに掲げたものは、J 1 グリットⅢ層出土の第四群土器である。

- ・ このものの器形は、(1)、(2)、と同じく底部より口縁にかけて外反気味に開く器形で、上ヶ底である。
- ・ 施文は、(2)と同様、重山形文の不整なもので、やはり「十腰内Ⅰ式」土器の施文パターンが変化した様相を示しているように認められる。(磨滅しているが口唇部に繩文の施文があるように見られる。)
- ・ 色調は、外面明黄褐色、内面も同様、一部に黒斑がある。胎土に砂粒を含む。焼成良好である。

〔深鉢形土器〕 - 4

〔K₂ II〕(現存 $\frac{2}{3}$ — 図上復原)

4



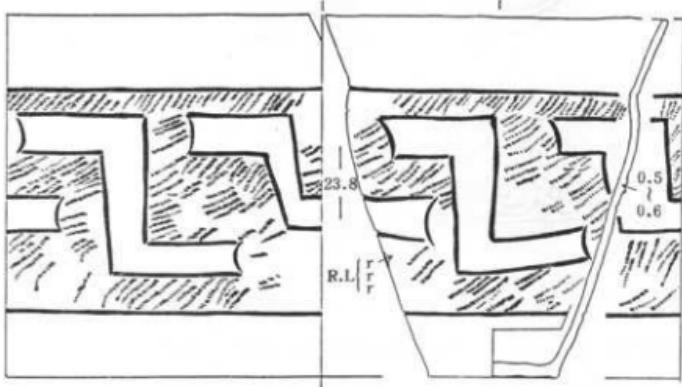
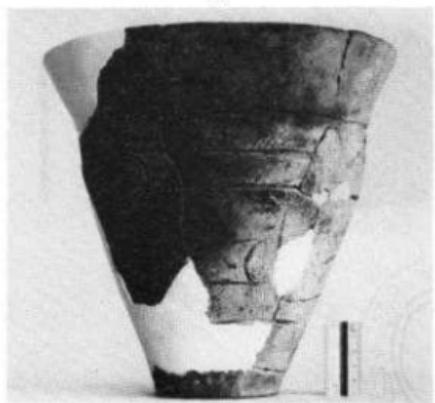
〔深鉢形土器〕 - 4

☆ ここに掲げたものは、K₂ グリット II 層出土の第四群土器である。

- このものの器形は、底径が大きく、肩部がふくらむ特徴を持ち、口頸部が広いものである。
- 施文は、肩部下より胴部には浅い条線文が、2条ずつ縦位に施文されるものである。
- 色調は、外面上半灰赤褐色、下半明赤灰色、内面上半灰褐色、下半灰黒色で、胎土・焼成とも良好である。

〔深鉢形土器〕 - 5 [K 2 II] (現存 $\frac{3}{4}$ — 図上復原)

5



〔深鉢形土器〕 - 5

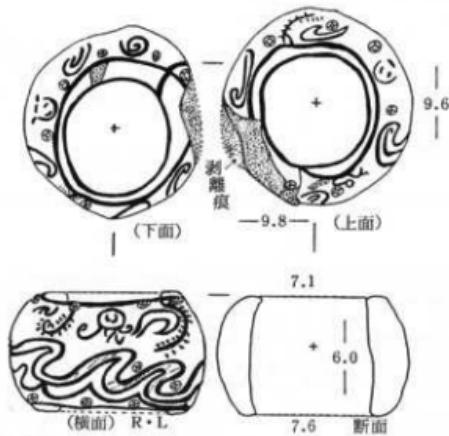
☆ ここに掲げたものは、K 2 グリット II 層出土の第四群土器である。

- このものは、平縁で口頸部が広く、かつ外反する器形で、肩部がわずかにふくらみ、直線的に底部に至る器形のものである。
- 施文は、上、下それぞれ 1 本の沈線で施文帯を区画し、その中に (1) と同様、沈線による区画文があり、その外側には縄文が施文される。また口唇部にも縄文が施文される。
- 色調は、外面灰黒色一部黄褐色、内面灰黒色、胎土・焼成は良い。

〔異形土器〕 - 6

〔J 1 II〕 (一部剥離—図上復原)

6



〔異形土器〕 - 6

☆ ここに掲げたものは、J 1 グリットⅢ層出土の異形土器である。施文から見て、第三群土器、すなわち「十腰内Ⅰ式」期のものと考えられる。

- このものの器形は、図に示すとおり、円形で中空のものである。上面、底面には深さ約5~6mmの穴があり、剥離痕のある部位を含めると、多分8つの穴が、両面にあるものと認められる。
- 施文は、上面・横面・下面ともにあって、その施文パターンは、既述した第三群土器の仲間と考えられる。
- この異形土器としたものは、あまり類例を見ないので、用途・機能等は不明である。類例を待ちたい。
- 色調は、外面赤褐色一部黒色、内面灰黒色、一部黒色、整形はやや粗で凹凸がある。胎土に細砂を含み、焼成やや悪くもろい。

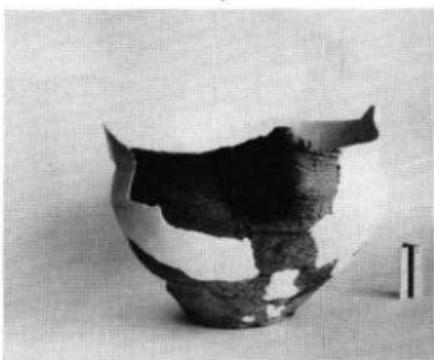
〔後期の土器〕

A・P・L 7

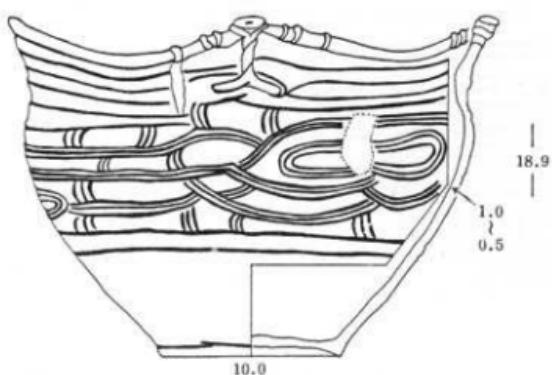
〔鉢形土器〕 - 7

(K 1 II) (現存 $\frac{1}{3}$ 一回上復原)

7



27.2



〔鉢形土器〕 - 7

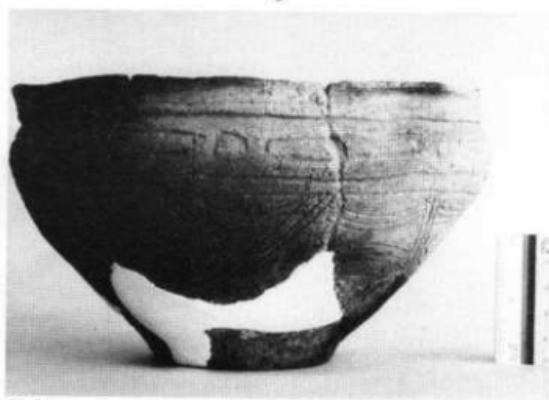
☆ このものは、A 地区 K 1 グリット II 層出土の第三群土器である。

- このものの器形も、この期の一典型で、大きい波状口縁に 4 つの山型突起を持ち、口頸部は大きく外反し、肩部がふくらみ、底部直前がしほまる器形のもので。また底面は上げ底である。
- 施文は、これもこの期の一大型をなすもので、山型突起より垂下する隆起線文を有し、3 本を基本とする沈線文が伸びやかに施文されるものである。
- 色調は、外面明黄褐色、内面明黄褐色一部黒色、胎土・焼成とも良好で堅敏である。

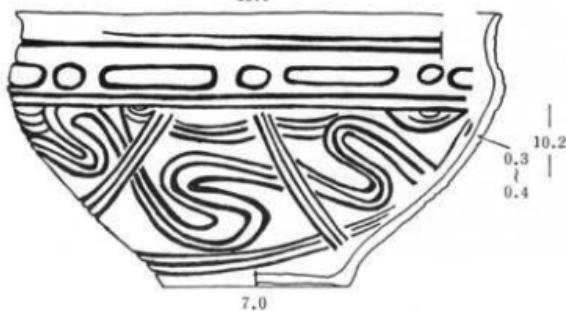
〔鉢形土器〕 - 8

〔K 2 II〕 (現存 $\frac{3}{4}$ - 図上復原)

8



18.0



10.2
0.3
0.4

〔鉢形土器〕 - 8

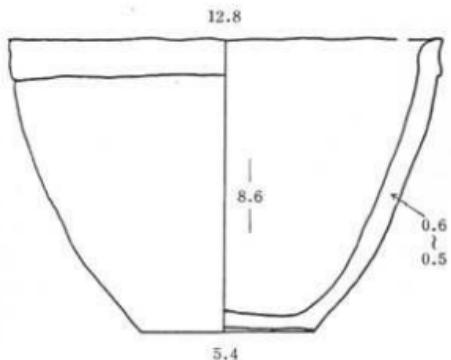
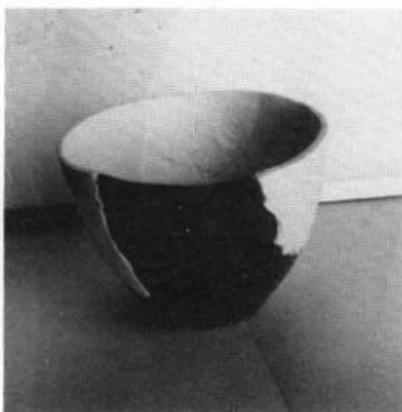
☆ ここに掲げたものは、A地区K 2 グリットII層出土の第三群土器、すなわち「十腰内式」鉢形土器である。

- このものの器形は、平縁で、口頸部が外反し、肩部がふくらみ、底部直前がしほまる器形で、(7)と同様の特徴を持つものである。
- 施文は、上下2本の沈線で、口頸部と胴部の文様帯を二分し、口頸部の文様帯には、円形文、長円文が施文される。また、胴部には、(7)と同様、3本を基本とする沈線文が施文されるが、この施文パターンも、(7)のものと同様、この期の典型的文様である。
- 色調は、外面黒色一部黄褐色、内面灰黑色一部黄褐色、胎土は良好であるが焼成やや不良である。

〔鉢形土器〕 - 9

〔K 2 II〕 (現存 $\frac{1}{3}$ — 図上復原)

9



〔鉢形土器〕 - 9

☆ ここに掲げたものは、A 地区 K 2 グリット II 層出土の第三群土器「十腰内 I 式」である。

- ・ 器形は、平縁で折り返えし口縁を持ち、胴部は弧状にふくらみ口頸部は、やや外反するものである。底面は、やや上げ底である。
- ・ このものは、無文土器で、色調は、外面茶褐色一部黒色、内面赤褐色、胎土に細砂を含み、焼成やや不良でもろい。

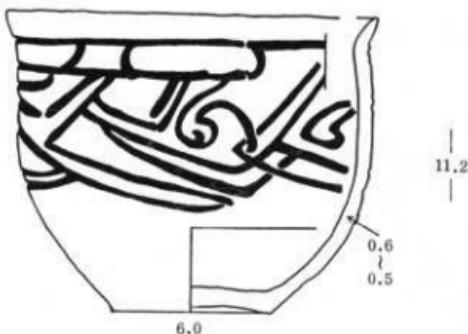
〔鉢形土器〕 -10

〔K 2 Ⅱ〕 (現存 $\frac{3}{4}$ —図上復原)

10



13.8



〔鉢形土器〕 -10

☆ このものは、A地区K 2 グリットⅡ層出土の第三群土器「十腰内1式」である。

- ・ 器形は、平縁で折り返えし口縁を持ち、口頸部が外反し、胸部下半がふくらむ特異な器形である。底面は上げ底を呈する。
- ・ 施文を見ると、「十腰内1式」期の基本的な施文パターンが崩れたかたちで沈線によって描かれるもので、「重山型文」へ移行する前段階の施文とも受けとれるものである。
- ・ 色調は、外面・内面とも黄褐色で両面に黒色斑点を認める。胎土・焼成とも良い。

〔後期の土器〕

A・P・L 11

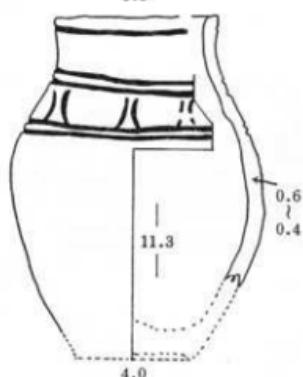
〔壺形土器〕 -11

〔J 1 II〕 (胴下半底面欠損一圖上復原)

11



5.5



〔壺形土器〕 -11

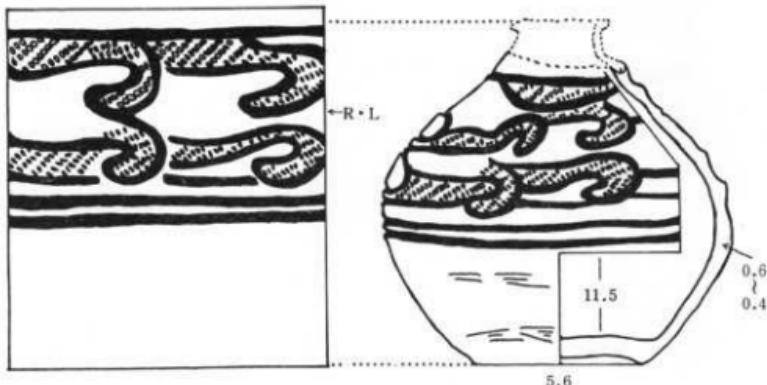
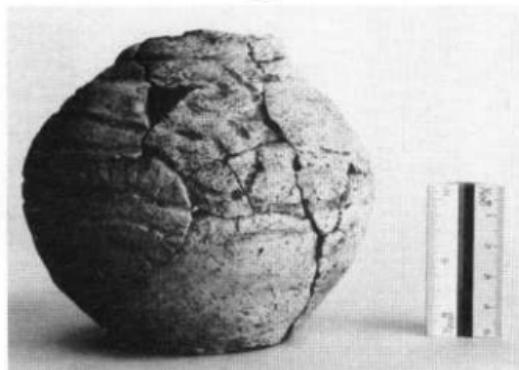
☆ ここに掲げたものは、A地区J 2 グリットⅡ層出土の第三群土器「十腰内Ⅰ式」である。

- ・ このものの器形は、平縁で器形に比して口縁径が大きく、胸部はふくらみ、肩部の張らないものである。
- ・ 施文は、頸部と肩部の境に2条、肩部と胸部の境に2条、口縁下に1条の沈線文によって文様帯が構成されており、前者の間に瓜形文が一つずつ施文されるものである。
- ・ 色調は、外面赤褐色、内面灰褐色を呈し、胎土・焼成とも良い。

〔壺形土器〕-12

〔J 1 II〕 (口頸部欠損—図上復原)

12



〔壺形土器〕-12

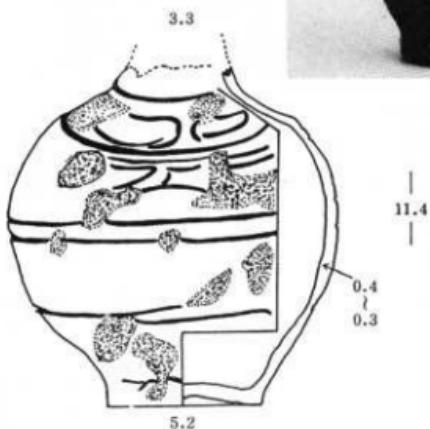
☆ このものは、A地区J 1 グリットII層出土の第三群土器「十腰内I式」である。

- このものは、口頸部が欠損しているため全体器形は不明であるが、肩部が張らず胴部が円形にふくらむ器形で胴部の最大幅は、中央より下方にある。また底面は上げ底を呈する。
- 施文は、肩部下と胴部下半の沈線文によって文様帯を区画し、2本の曲線によるカギ型の単位文様が二段に施文され、R・L縄文が充填されているものである。
- 色調は、内・外面とも灰褐色を呈し、一部に黒色斑点がある。胎土に砂粒を含み焼成もやや不良である。

〔壺形土器〕 -13

(J 1 II) (口径部欠損)

13



〔壺形土器〕 -13

☆ ここに掲げたものは、A地区 J 1 グリット層出土の第三群土器「十腰内 I式」である。

- この土器の器形は、口頸部が欠損のため不明であるが、肩部が張らず胴部は球状にふくらみ、底部直上でしほまる器形である。また底面は上げ底である。
- 施文は、頸部と肩部の境に1条、肩部と胴部の境に3条、胴部中央に2条、その下位に1条の沈線文をめぐらせるものである。

このうち肩部の文様帶は剥離痕によって不明であるが、「十腰内 I式」の文様パターンに類似するものである。

- 色調は、外面黄褐色、内面も黄褐色である。器表面がヒビ割れが多く、もろいもので、胎土・焼成とも不良なものである。

〔深鉢形土器〕 -14

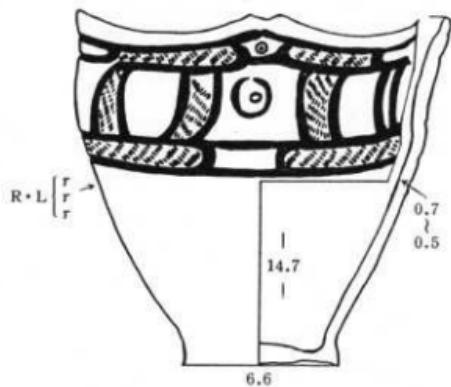
〔K 1 II〕

(現存 $\frac{3}{4}$ — 図上復原)

14



5.8



〔深鉢形土器〕 -14

☆ ここに掲げたものは、A地区K1 グリットⅡ層出土の第三群土器「十腰内Ⅰ式」である。

- このものの器形は、波状口縁で、低い山型突起を4つ持つもので、口縁部が外反し、肩部がふくらみ、底部直上で強くしほまる器形である。この器形も「十腰内Ⅰ式」土器のパターンの一つであろう。
- 施文は、口縁直下と肩部に2条の沈線文によって文様帶を区画し、その文様帶に二重円文と縦位の沈線文を弧状に一対ずつ施文し、縄文を充填した文様構成である。この施文も「十腰内Ⅰ式」土器の典型的パターンであろう。
- 色調は、外面灰黒色、内面黄褐色、胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。

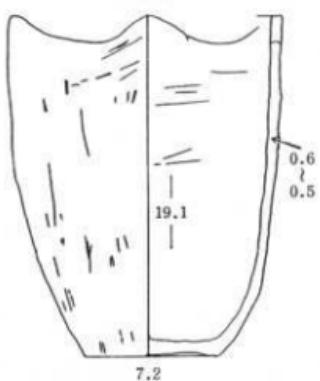
〔深鉢形土器〕 -15

〔J 1 II〕 (現存 $\frac{3}{4}$ - 図上復原)

15



15.2



〔深鉢形土器〕 -15

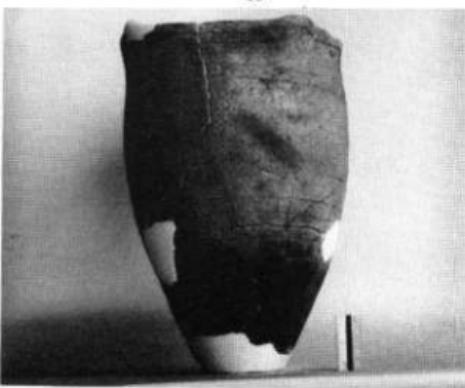
☆ このものは、A地区J 1 グリットII層の第三群土器「十腰内I式」である。

- 器形は、波状口縁で、低い山型突起を4つ持つものようである。一見すると全体器形は「土師器」の壺形に類似する器形であるが、第三群土器の仲間であろう。
- 施文はなく、縦位に整形した整形痕が観察される。色調は、外面上半灰黒色、下半赤褐色、内面上半灰黒色、下半黄褐色、胎土・焼成ともやや不良である。

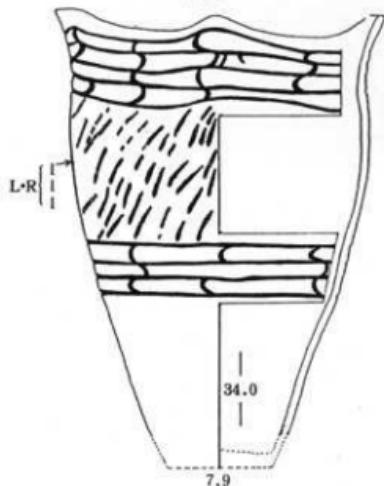
〔大形、甕形土器〕-16

〔J 1 II〕 (底部欠損—図上復原)

16



— 24.8 —



〔大形、甕形土器〕-16

☆ ここに掲げたものは、A地区 J 1 グリット II 層出土の第三群土器「十腰内 I 式」である。

- この甕形土器の器形は、波状口縁で 4 つの低い山型突起を持つもので、口頸部が外反し、肩部から脇部にかけて、ゆるくふくらむ器形である。
- 施文は、口頸部から肩部にかけて、横走する 5 本の沈線がめぐり、その間をつなぐ S 字状の沈線が垂下する文様帶を構成し、さらに脇下半には同じ手法の 4 本の沈線と S 字状の沈線文が施文されている。

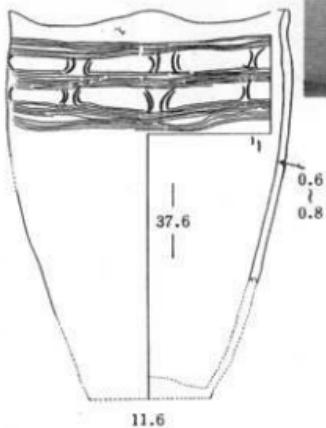
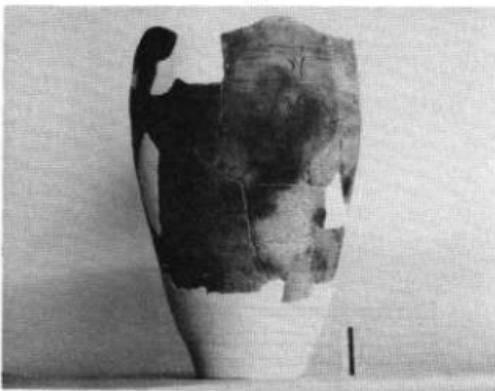
この上段と下段の文様帶の間には、繩文が施文されているが、繩文を施文した後に整形されたものようである。

- 色調は、外面黄褐色一部灰褐色、内面灰褐色一部黄褐色、胎土・焼成とも良好である。

〔大形、甕形土器〕 -17

(K1 II) (胴下部欠損一回上復原)

17



〔大形、甕形土器〕 -17

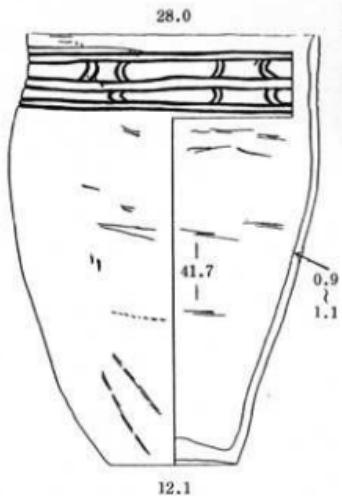
☆ このものは、A地区K1 グリットⅡ層出土の第三群土器である。

- 器形は、波状口縁で低い山型突起を4つ持ち、口頸部はゆるく外反し、肩部から胴部にかけてゆるくふくらむもので、この期の典型的な器形と思われる。
- 施文もまた細い沈線文が頸部、肩部、胴部に2条を一对として8~10条施文され文様帶を構成している。その間には、瓜形文を大きくした文様が上段、下段をつなぐように2本1対ずつ施文されるものである。この文様もまた「十腰内I式」土器の施文パターンの一つである。
- 色調は、外面黄褐色一部黒色、内面も黄褐色で一部に煮沸痕が付着する。胎土・焼成とも良好である。

〔大形、斐形土器〕 -18

〔K 1 Ⅲ〕 (胴下半一部欠損) 図上復原)

18



〔大形、斐形土器〕 -18

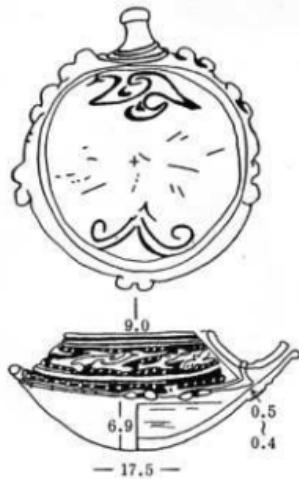
☆ このものは、A地区K1 グリットⅡ層出土第三群土器「十腰内Ⅰ式」である。

- このものの器形は、(16・17) が波状口縁などのに対して、平縁のもので、頸部と肩部に2~3条を一対とする沈線が三段にめぐり文様帶を構成している。この三段にめぐる横走沈線間を(17) と同様、瓜形文的な弧状文が一対ずつ施文される。
- 器形は、(17) と同様、口頸部はゆるく外反し、肩部はゆるやかにふくらむものである。また底面は上げ底を呈する。
- 色調は、外面黄褐色一部黒色（煮沸痕付着）、内面も黄褐色を呈し、煮沸痕の付着がある。胎土・焼成ともよい。

〔注口土器〕 -19

〔J 1 III〕 〔完形品〕

19



〔注口土器〕 -19 (精製)

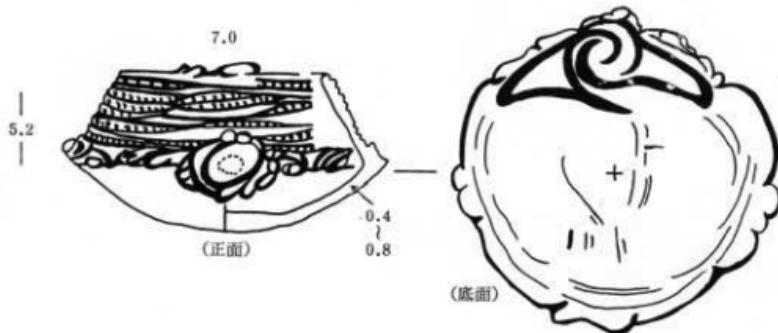
☆ ここに掲げたものは、A地区 J 1 グリットⅢ層出土、第六群土器「大洞B・C式」である。

- ・ 器形は極めて均整のとれたもので、底部は丸底である。注口部は丸底の延長線上にすんなり伸びており、口頸部は、末広がりになっている典型的な器形である。
- ・ 施文は、口縁直下に、2条の沈線がめぐり、その下方には、「羊齒状文」が肉彫りに施文されているものであるが、この「羊齒状文」が変形していることから、次の土器型式である「大洞C1式」に近い時期のものと考えられる。
- ・ 色調は、外面灰黒色、胎土・焼成とも最良である。

〔注口土器〕 -20

〔J 2 III〕 (注口部欠損)

20



〔注口土器〕 -20 (精製)

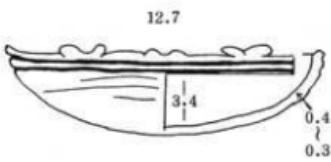
☆ ここに掲げたものは、A地区 J 2 グリットⅢ層出土の第七群土器「大洞C1式」である。

- このものの器形は、口縁が平縁であるが、小突起を1対持つものである。また末広がりの口頸部は、(19)よりも直線的に広がる器形である。また、このものも丸底である。
- 施文は、口縁直下より肩部、および注口部、さらに(19)と同様底面にも施文されるものである。その主文様は、やや不整な刻目文が密に施文される。
- 色調は、外面灰黒色、内面黒色、胎土・焼成とも最良である。

〔皿形土器〕-21

(J 1 II)

21



〔皿形土器〕-21 (精製)

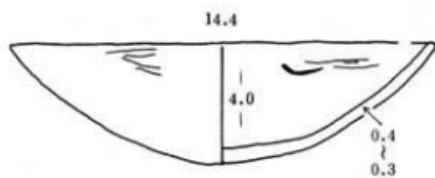
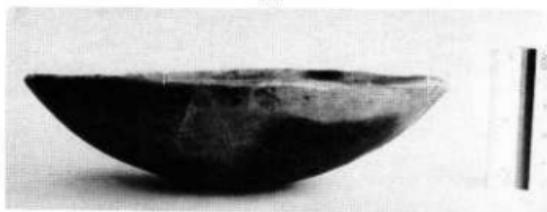
☆ ここに掲げたものは、A地区 J 1 グリットⅡ層出土、第八群土器「大洞C2式」である。

- ・ このものの器形は、口縁に二叉山形突起を持つもので、口頸部のカーブが強い器形のもので、丸底である。
- ・ 施文は、口頸部に2条の沈線文がめぐるもので、他は無文で研磨されたものである。
- ・ 色調は、内外面とも灰黒色で胎土・焼成とも良好である。

〔皿形土器〕 -22

〔K 2 II〕

22



〔皿形土器〕 -22 (精製)

- ☆ ここに掲げたものは、A地区K 2 グリットⅡ層出土の第十群土器「大洞A式」である。
- このものの器形は、(21)と異なり、口頸部は内湾しないもので、底面は丸底である。この器形的特徴から一応、第十群土器としたが疑問も残る。
 - 色調は、外面明燈色、底面黒色、内面も明燈色一部黒色、胎土には細砂を含むが焼成は良い。

〔大形皿形土器〕 -23

(J 2 Ⅲ)

(現存 $\frac{2}{3}$ —図上復原)

23



〔大形、皿形土器〕 -23 (精製)

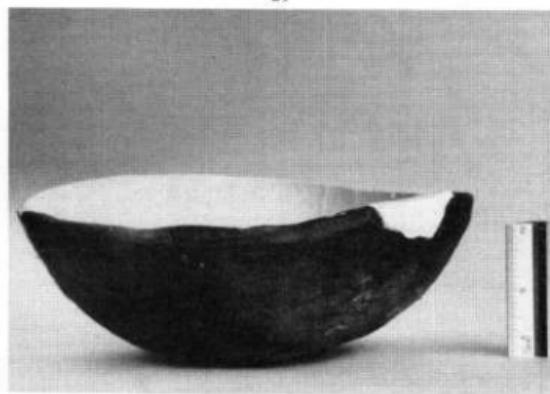
☆ ここに掲げたものは、A地区J 2 グリットⅢ層出土の第七群土器「大洞C1式」である。

- このものの器形は、口径が大きく、器高の低いのが特徴である。晩期には、出土数は少ないが、この種の例は出土する。
- 施文は、口縁下に2条の沈線がめぐり、底部上には3条の沈線文が施文され、その間に、多少流れているがx字文が施文され、縫文の充填がなされている。
- 色調は、外面・内面とも黄褐色を呈する。胎土・焼成とも最良である。なお修理孔は口縁下に2つ、底面に1つ存在する。

〔塊形土器〕-24

〔J 2 III〕 (現存 $\frac{1}{2}$ - 国上復原)

24



13.3



〔塊形土器〕-24 (粗製)

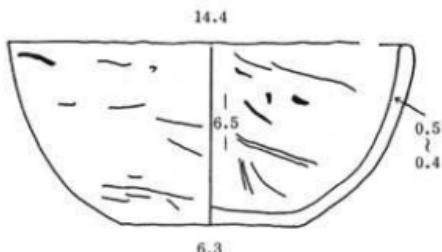
- ☆ このものは、A地区J 2 グリットⅢ層より出土した第八群土器「大洞C2式」である。
- このものの器形は、不整な平縁をなすもので、丸底をなし、胴部はゆるく内湾するもので器厚があり重さがあるものである。
 - このものは無文で、横方向に整形がなされているものである。
 - 色調は、外面灰赤褐色、内面明赤褐色、胎土・焼成とも良いが、やややわらかい焼成である。

〔塊形土器〕 -25

〔J 2 Ⅲ〕

(現存 $\frac{1}{2}$ —図上復原)

25



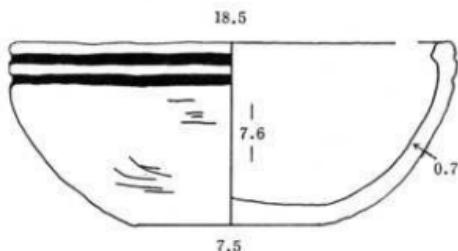
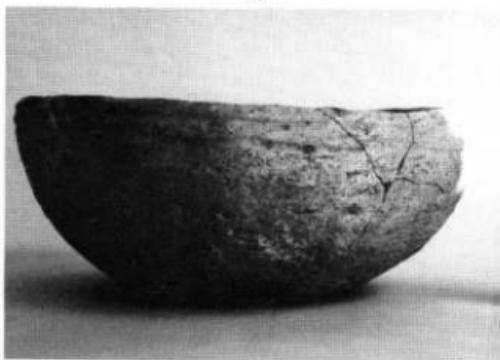
〔塊形土器〕 -25 (粗製)

- ☆ ここに掲げたものは、A地区J 2 グリットⅢ層出土の第八群土器「大洞C 2 式」である。
- このものの器形は、不整な平縁下より内湾し胸部下半が強くふくらむもので底面は平底である。また、器表面には横方向の整形痕がある。
 - 色調は、外面灰黒色、内面灰褐色、底面は赤褐色を呈する。胎土には砂粒を含むが焼成は良い。

〔塊形土器〕 -26

〔J 2 Ⅲ〕 (完形品)

26

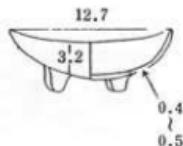
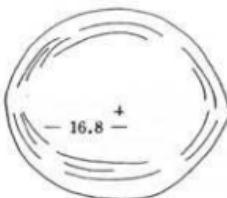
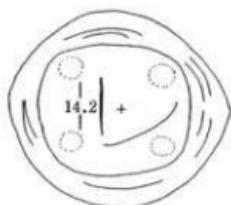


〔塊形土器〕 -26 (粗製)

- ☆ ここに掲げたものは、A地区J 2 グリットⅢ層出土の第八群土器「大洞C 2 式」である。
- このものの器形は、平縁で口縁より強く内傾する器形のもので、底面は平底をなすものである。
 - 施文は、口縁下に2条の沈線文がめぐるものである。胴部は無文で横方向に整形されている。
 - 色調は、器外面は灰褐色、内面赤褐色、胎土は悪く砂粒を多く含み、ザラザラしており、焼成は良い。

〔四脚付異形皿形土器〕 -27 (J 2 II) (縮尺不同)

27



〔四脚付異形皿形土器〕 -27 (精製)

☆ ここに掲げたものは、A 地区 J 2 グリット II 層出土の第八群土器「大洞 C 2 式」である。

- ・ このものの器形は、図に示すとおり、幅の広い木葉形をなすもので、底面には四脚がつくものである。
- ・ 施文はなく無文であるが器面全体に朱ぬり痕が残っているものである。
- ・ 色調は、暗黒色一部黒色を呈するが朱ぬり痕を認める。胎土・焼成とも最良である。

〔浅鉢形土器〕 -28

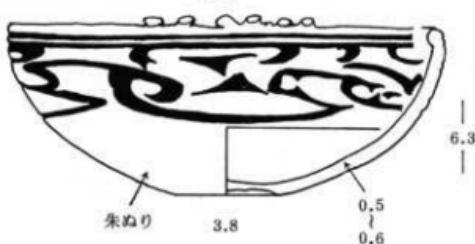
(J 2 III)

(完形品)

28



16.3



〔浅鉢形土器〕 -28 (精製)

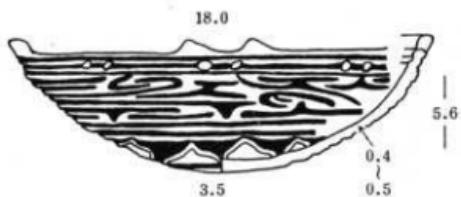
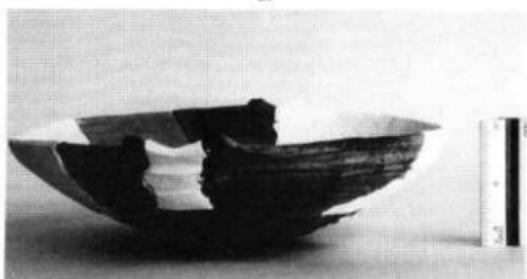
☆ このものは、A地区J 2 グリットⅢ層出土の第八群土器「大洞C 2式」である。

- このものの器形は、平縁に二叉山型突起をつけるもので、口頸部より胴部にかけて強く内湾するものである。また、底面は、上げ底である。
- 施文は、口縁下に2条の沈線がめぐり、胴部には、浮彫り状の文様が施文されるものである。
- 色調は、外面上半朱ぬり、下半灰黄色、内面上半朱ぬり、下半黄褐色、胎土・焼成とも最良である。

〔浅鉢形土器〕 -29

(K 2 II) (現存 $\frac{2}{3}$ — 図上復原)

29



〔浅鉢形土器〕 -29 (精製)

☆ ここに掲げたものは、A地区K 2 グリットII層出土の第九群土器（大洞C 2 - A式）

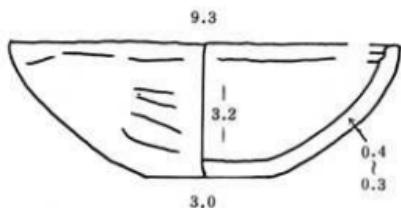
→仮称である。

- このものの器形は、平縁に山型突起を2と1対ずつ4対付ける口縁で、ゆるく弧を描く胴部を有するものである。
- 施文は、頸部に3条の沈線と小突起を備え頸部文様帯を構成し、胴部には、2条の沈線で胴部文様帯を形成し、そこには「大洞C 2 式」の主文様と未完成の「入り組み工字文」が施文されるものである。また、底面直上にも「入り組み工字文」の変形した文様がある。
- 色調は、外面灰黒色、内面も同様であるが一部黒褐色を呈する。胎土・焼成とも最良である。

〔浅鉢形土器〕 -30

〔J 2 III〕

30



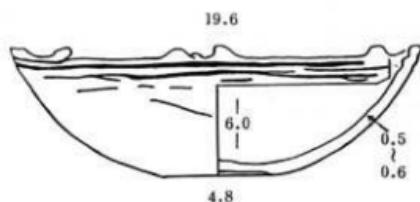
〔浅鉢形土器〕 -30 (粗製)

☆ ここに掲げたものは、A地区 J 2 グリットⅢ層出土の第八群土器（大洞C2式）である。

- このものは、平縁・平底のもので、口縁下の内面に沈線が1本めぐる。口縁下がかるく内湾するもので、(29)に比較するとカーブが強く、やや深い器形である。
- 施文はなく、横方向に整形痕が認められる。
- 色調は、内外面とも赤褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。

〔大形、浅鉢形土器〕-31 (J 1 II) (完形品)

31



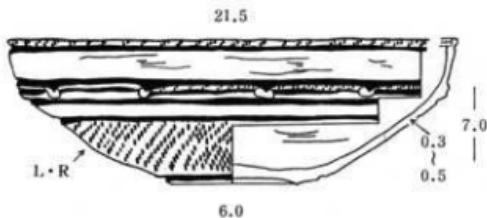
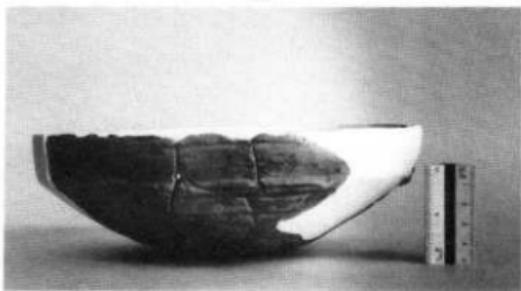
〔大形、浅鉢形土器〕-31 (半精製)

- ☆ ここに掲げたものは、A 地区 J 1 グリットⅢ層出土の第八群土器(大洞 C 2 式)である。
- ・ このものは、平縁に二叉山型突起を 4 対付けるもので、胸部はゆるやかに内湾する器形のものである。また底面は上ヶ底である。
- ・ 施文は、口縁直下に不整な沈線が 2 条めぐる他は無文のものである。器表面は横方向の整形痕が認められる。
- ・ 色調は、器外面灰褐色、内面灰黑色一部黒色である。胎土・焼成とも良好で、一応半精製土器とした。

〔浅鉢形土器〕-32

〔K2Ⅱ〕 現存 $\frac{1}{2}$ (図上復原)

32



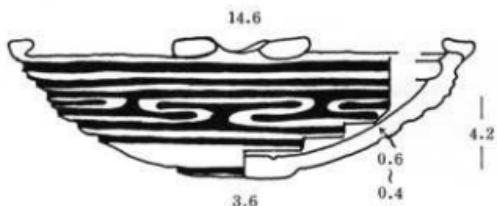
〔浅鉢形土器〕-32 (精製)

- ☆ ここに掲けたものは、A地区K2 グリットⅡ層出土の第十群土器(大洞A式)である。
- このものの器形は、平縁で、口頸部はやや外反し、肩部が張る器形である。また底面は上げ底である。この口頸部がやや外反し、肩部が張る器形は、「大洞A式」土器の一タイプと考えられる。
 - 施文は、口縁直下に沈線文と繩文、肩部には横に突出する突起と沈線文、胴下部には、上下各1本の沈線によって区画される中に繩文が施文されるものである。また、内面の口縁下にも1本の沈線がめぐっている。
 - 色調は、外面黄褐色、内面灰黄色一部黒色を呈する。胎土・焼成は良好で堅緻である。

〔浅鉢形土器〕-33

〔K2Ⅱ〕

33



〔浅鉢形土器〕-33 (精製)

- ☆ この土器は、A地区K2 グリットⅡ層出土の第十群土器（大洞A式）である。
- このものの器形は、平縁に低い突起を四対付けるもので、底面は平底である。また、口縁部がやや外反し、肩部がやや張るものである。
 - 施文は、平行沈線が頸部に2条、その下すなわち胴部には完成された「入り組み工字文」がある。また底部直上と口縁内側にも沈線がめぐるものである。
 - 色調は、外面灰褐色一部黒色、内面黄褐色を呈するが、内外面に朱ぬり痕がある。胎土には細砂を含むが、焼成も良く堅緻である。

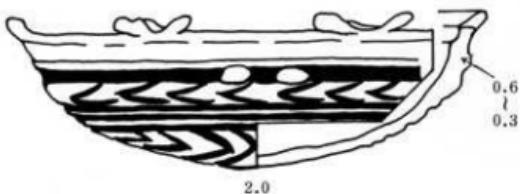
〔浅鉢形土器〕-34

〔K2 II〕

34



15.2

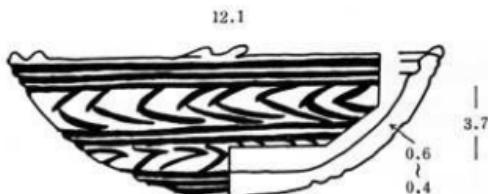


〔浅鉢形土器〕-34 (精製)

- ☆ ここに掲げたものは、A地区K2 グリットII層出土の第十群土器（大洞A式）である。
- この土器の器形は、(33)に比して、口縁の突起は大きく、また口頸部の外反も強いものである。肩部はやや強く張り出ており胴部は、ゆるいカーブで底面に至る器形で底面径は小さく丸底に近い底面である。
 - 施文は、頸部に無文帯をもち、沈線と横に突出する2と1対の突起を肩部に付すものである。文様帯は沈線によって二段に区画されており、「矢羽根状文」が、方向を逆にして施文されている。
 - 色調は、内・外面とも灰黒色を呈する。胎土・焼成とも最良である。

〔浅鉢形土器〕-35 [K 2 II] (一部欠損)

35



〔浅鉢形土器〕-35 (精製)

- ☆ ここに掲げたものは、A地区K2 グリットⅡ層出土の第十群土器（大洞A式）である。
- このものの器形は、平縁に二叉山型突起を4対付け、口頸部は、やや外反氣味のもので丸底をなすものである。
 - 施文は、口頸部に3条、胴中央部に2条、底部直上に3条の沈線によって施文帯を二段に区画し、矢羽根状文を方向を変えて二段に施文したものである。本遺跡出土のものは、すべて矢羽根状文は逆方向をなすのが一般的である。
 - 色調は、内外面とも黄褐色を呈し、朱ぬり痕が認められる。胎土・焼成とも最良である。

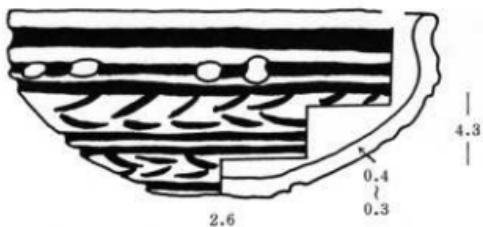
〔浅鉢形土器〕-36

(K 2 II) (現存 $\frac{2}{3}$ —図上復原)

36



10.0



〔浅鉢形土器〕-36 (精製)

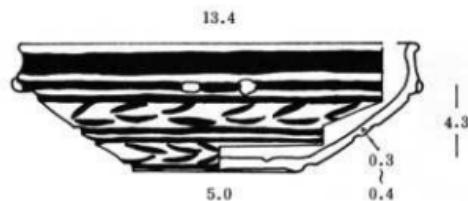
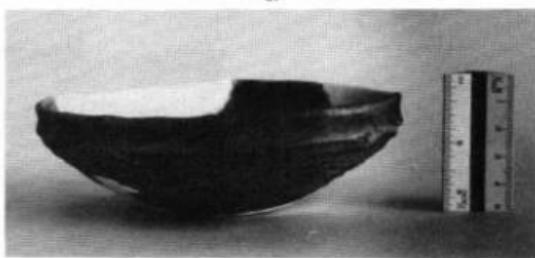
☆ ここに掲げたものは、A地区K 2 グリットII層より出土した第十群土器(大洞A式)である。

- このものの器形は、口頸部が(34・35)に比して外反が強く、肩部の張りが強いもので、口縁は平縁のものである。また、底面は中高のもので安定性に欠ける。
- 施文は、頸部に1条の太い沈線、肩部には2条の沈線、胸部に2条、底部直上に1条の沈線によって文様帶を区画し、その中に矢羽根状文が二段に施文されるものである。
- 色調は、外面暗灰白色一部黒色、内面灰白色一部黒色、胎土・焼成とも良好である。

〔浅鉢形土器〕 -37

(K 2 II) (口縁一部欠損—図上復原)

37



〔浅鉢形土器〕 -37 (精製)

- ☆ ここに掲げたものは、A地区K2 グリットII層出土の第十群土器（大洞A式）である。
- この土器の器形は、口縁は平縁で口頸部の外反が強く、肩部が強く張るもので、底面がやや上げ底氣味である。
 - 施文は、頸部に太い沈線が1条、肩部に2条、胴中央部に2条、底部直上に1条の沈線がある。このパターンは(36)と同様である。矢羽根状文は二段に施文されており、その施文手法は、(34~36)と同様である。
 - 色調は、外面灰褐色一部黒色、内面黒褐色、胎土・焼成は良好である。

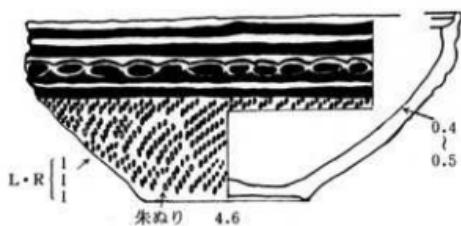
〔浅鉢形土器〕 -38

〔J 2 III〕

38

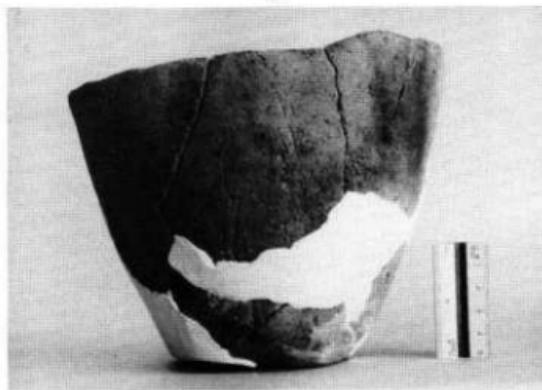


13.0

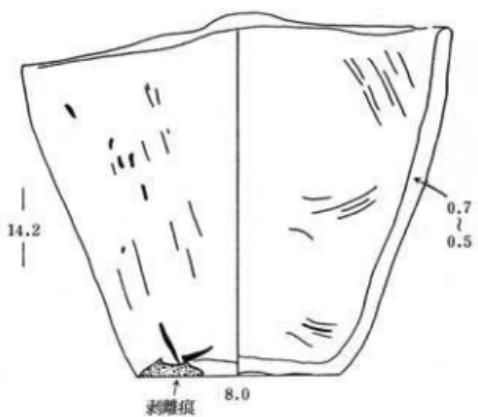


〔浅鉢形土器〕 -38 (精製)

- ☆ ここに掲げたものは、A地区J 2 グリットⅢ層出土の第十群土器（大洞A式）である。
- このものは、平縁で、口頸部の外反は弱く、肩部が張る器形のもので、底面は上げ底のものである。
- 施文は、口頸部に2条、肩部下に2条の沈線がめぐり、胸部には繩文が施文される。この沈線に区画された肩部には、めがね状（仮称）の文様が施文されている。
- ☆ 「大洞A式」土器群ではP・L 33- (33) の「入り組み工字文」、P・L 34~P・L 37- (34~37) に示す「矢羽根状文」、それに、(38) に示す「めがね状文→仮称」が主文様として本遺跡では出土する。
- 色調は、外面茶褐色一部黒色、内面赤褐色で朱ぬり土器である。胎土・焼成とも最良である。



17.2



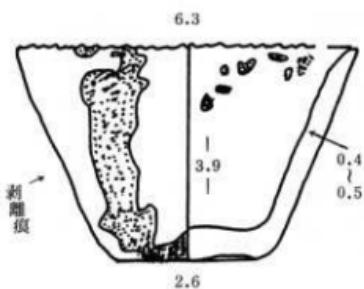
〔鉢形土器〕 -39 (粗製)

- ☆ ここに掲げたものは、A地区J1グリットⅡ層出土の第三群土器(十腰内I式)である。
- このものの器形は、不整で、右側面と左側面では器高が異なるものである。また、底面も不整であるが、わずかに上げ底である。
 - 施文はなく、低い山型突起があり、波状口縁であることから第三群土器とした。
 - 色調は、外面黄褐色一部黒色、内面灰褐色、胎土に砂粒を含む。焼成はやや良い。

〔小形鉢形土器〕 -40

〔J 2 Ⅲ〕

40



〔小形、鉢形土器〕 -40 (粗製)

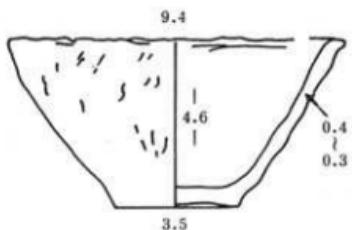
☆ このものは、A地区J 2 グリットⅢ層出土の第七群土器（大洞C1式）である。

- このものの器形は口縁が小波状を呈し、全体形は、胴下半においてわずかにしほまる器形である。また口径に対して底面径がやや大きく、小形ながら深いものである。
- 施文はないが、器面の内外に剥離痕を認める。色調は、外面灰褐色、内面黒褐色を呈し、胎土・焼成ともやや良好である。

〔小形鉢形土器〕 -41

(J 2 III)

41



〔小形、鉢形土器〕 -41 (粗製)

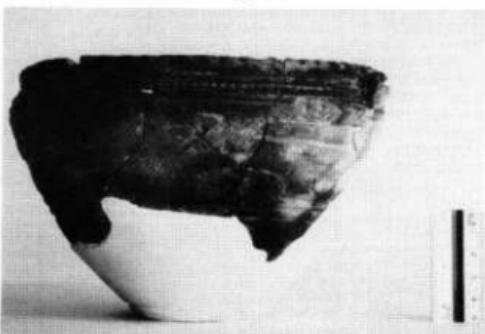
☆ ここに掲げたものは、A地区 J 2 グリットⅢ層出土の第八群土器（大洞C 2 式）である。

- ・ このものの器形は、やや不整な平縁で、口頸部は急に外反するものである。また、底面は上げ底である。
- ・ 施文はなく、器表面に継位の擦痕がある。
- ・ 色調は、外面の半面が赤褐色、半面が黒色を呈する。内面は赤褐色を呈するが一部黒色である。胎土に細砂を含むが、焼成は良好で堅いものである。

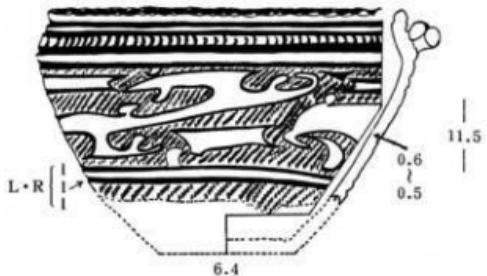
〔把手付、鉢形土器〕 -42

〔K 2 II〕 (現存 $\frac{1}{2}$ —図上復原)

42



17.2



〔把手付、鉢形土器〕 -42 (精製)

☆ ここに掲げたものは、A 地区 K 2 グリット II 層出土の第七群土器（大洞 C1 式）である。

- このものの器形は、口縁が小波状を呈し、刻目が付けられている。口頸部は、外反するが肩部が張る器形で、最大幅は肩部にある。胴部はゆるくふくらむものであるが下半は欠失しているため底面等は不明である。
- 施文は、頸部に 2 条と、肩部に 1 条の太い沈線文がめぐり、その間に刻目文が施文される。また、肩部下には、1 条の沈線、胴部下半にやや不整な 2 条の沈線があつて胴部文様帶と胴部下位の縄文帶を区画している。胴部の文様帶には、縄文を充填したやや横に広がる k 字文を浮き彫りに施文したもので、縄文原体は、下段の縄文と同じものと考えられる。
- 色調は、外面赤褐色一部黒色、内面黒色（煮沸痕一部に付着）である。胎土・焼成とも良好で堅緻である。

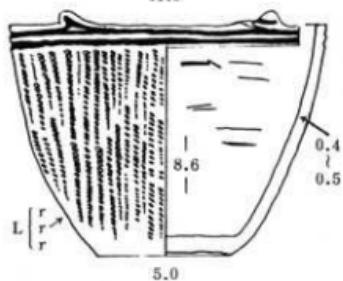
〔鉢形土器〕-43

〔J1 II〕

43



11.9



〔鉢形土器〕-43 (半精製)

☆ ここに掲げたものは、A地区 J1 グリットⅡ層より出土した第七群土器（大洞C1式）である。

- このものの器形は、平縁に小突起が付けられ、肩部が張らずゆるやかに弧を描く胴部のものである。底面はわずかに上げ底である。
- このものの施文は、口縁直下に2条の沈線がめぐるもので、そのうち上部の沈線は小突起にも入りこんでいる。肩部下には、単軸燃糸文が縦位に施文される。
- 色調は、外面暗褐色、内面赤褐色を呈する。胎土・焼成とも良好で堅緻である。

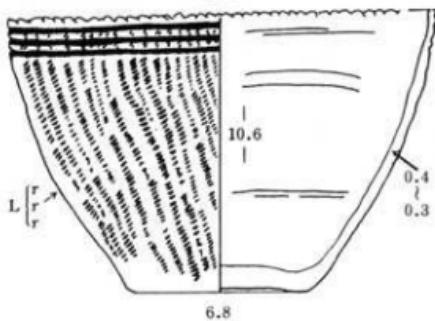
〔鉢形土器〕 -44

(J 1 II)

44



16.1



〔鉢形土器〕 -44 (半精製)

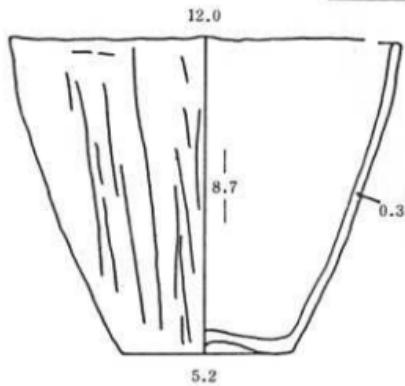
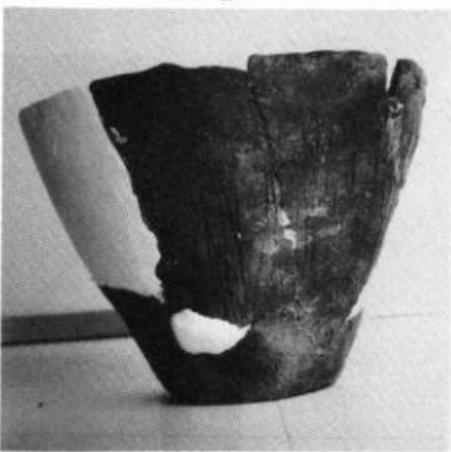
☆ ここに掲げたものは、A地区 J 1 グリット II 層出土の第八群土器（大洞 C 2 式）である。

- このものの器形は、口縁が小波状を呈し、底面はわずかに上げ底のもので、肩部の張りがなくゆるやかに弧を描く胴部を有するものである。
- 施文は、口頸部に 3 条の平行沈線がめぐり、胴部には、単軸撲糸文が密に施文されるものである。
- 色調は、外面暗褐色、内面上半黒色、下半灰黑色を呈し、胎土・焼成とも良好で堅緻である。

〔鉢形土器〕 -45

〔J 1 II〕 (現存 $\frac{1}{3}$ — 図上復原)

45



〔鉢形土器〕 -45 (粗製)

☆ ここに掲げたものは、A地区 J 2 グリット II 層出土の第八群土器（大洞C 2 式）である。

- このものの器形は、口縁は不整な平縁で、底面は上げ底である。口頸部より胴部へかけては、ゆるやかなカーブを描く器形である。
- 施文は、第八群土器のパターンである条痕文がやや右下りに施文されるものである。
- 色調は、内外面とも灰黒色である。胎土・焼成ともやや不良で器表面はザラザラしている。

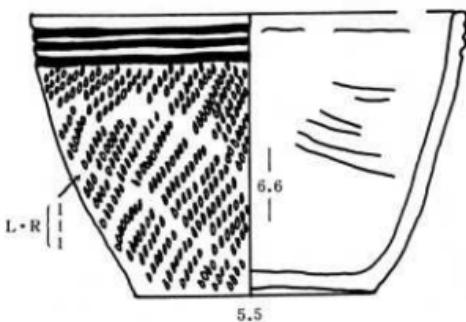
〔鉢形土器〕 -46

〔J 2 III〕

46



10.4



〔鉢形土器〕 -46 (粗製)

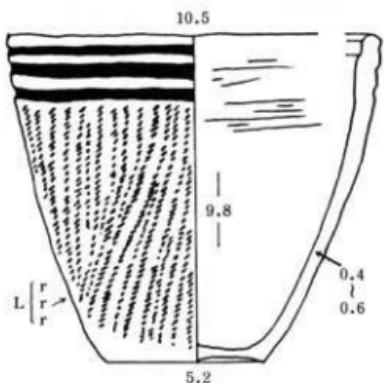
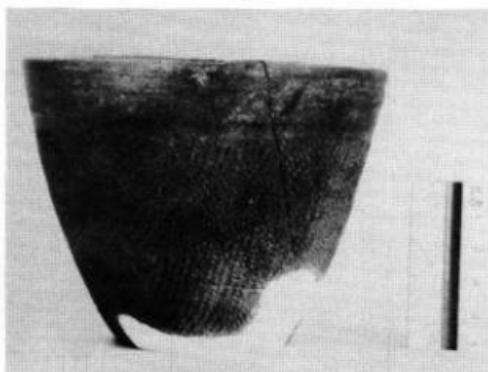
☆ ここに掲げたものは、A地区J 2 グリットⅢ層出土の第八群土器（大洞C 2式）である。

- このものの器形は、平縁で、口径の大きさに対して器高が低いものである。このものは、肩部が張らず、ゆるやかにカーブする胸部をもつもので底面は上げ底である。
- 施文は、口頬部に平行沈線文が3条施文され胸部には縄文が施文されるものである。
- 色調は、外面黒色、内面も黒色である。胎土・焼成とも良好で堅緻である。

〔鉢形土器〕 -47

〔J 1 III〕

47



〔鉢形土器〕 -47 (半精製)

☆ ここに掲げたものは、A地区 J 1 グリットⅢ層出土の第八群土器（大洞C2式）である。

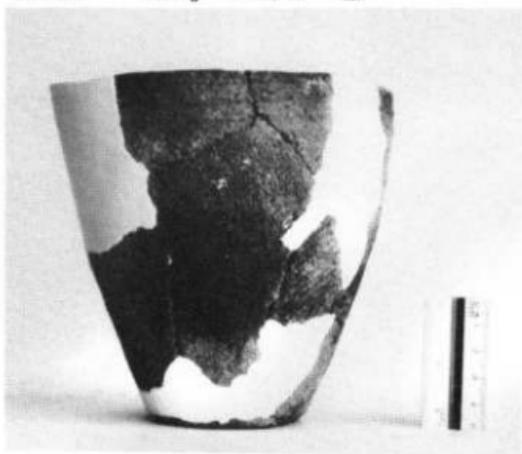
- このものの器形は、肩部が張らずゆるやかなカーブで底面に至る器形で、上げ底である。
- 施文は、口縁直下に3条の平行沈線文が施文され、胴部には単軸燃糸文がやや不整に施文されるものである。
- 色調は、外面灰黒色一部赤褐色、内面上半黒色、下半茶褐色を呈する。胎土・焼成とも良好で堅緻である。

〔鉢形土器〕 -48

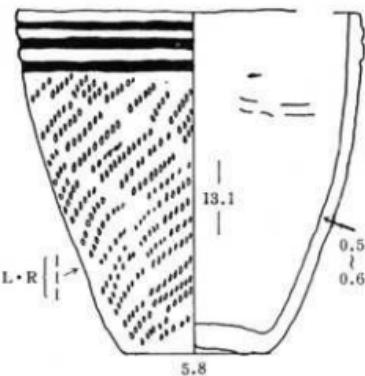
〔K 2 II〕

(現存 $\frac{2}{3}$ —図上復原)

48



13.3



〔鉢形土器〕 -48 (粗成)

☆ ここに掲げたものは、A地区K 2 グリットII層出土の第八群土器（大洞C 2式）である。

- このものの器形は、鉢形にしてはやや深いもので深鉢形に近いものである。平縁で、ゆるやかなカーブの胴部をもち、底面は上げ底を呈する。
- 施文は、口頸部に3条の平行沈線をめぐらせており、胴部には縄文を施文している。今回の発掘調査では、O段多条のL・Rが多いようである。
- 色調は、外面下半茶褐色一部黒色、内面上半黒色、下半茶褐色、胎土・焼成は良い。

〔晩期の土器〕

A・P・L 49

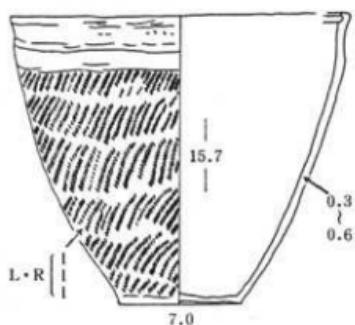
〔鉢形土器〕 -49

(K 2 II) (現存 $\frac{1}{2}$ —図上復原)

49



19.2



〔鉢形土器〕 -49 (粗製)

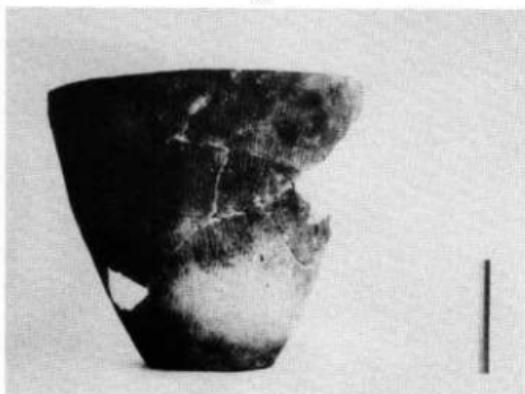
☆ このNo.49、としたものは、A地区K 2 グリットII層出土の第八群土器(大洞C 2式)である。

- このものの器形は、平縁で口頸部が外反し肩部がやや張るもので、底面がわずかに上げ底を呈する。
 - 施文は、口頸部に無文帯をもち、肩部下には縄文が密に施文されるものである。
- ☆ この口頸部が外反し、無文帯をもつものは、一タイプとして把握できるようである。

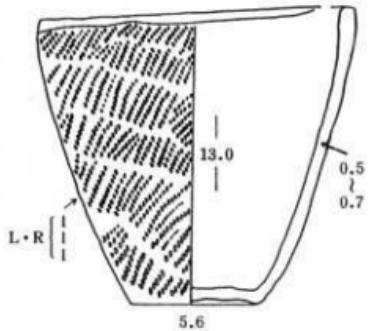
〔鉢形土器〕 -50

〔K 2 II〕

50



13.2



〔鉢形土器〕 -50

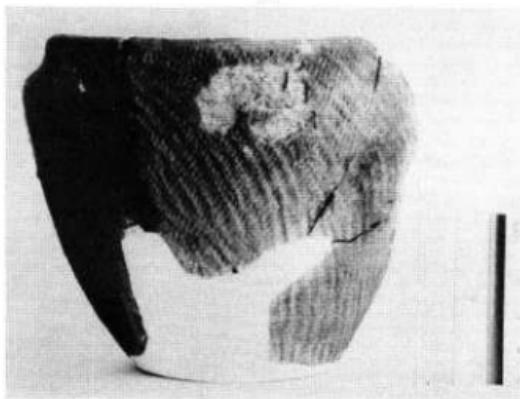
☆ ここに掲げたものは、A地区K 2 グリットII層より出土した第八群土器（大洞C 2 式）である。

- このものは、器形が不整なものである。口縁は平縁で、口頸部はやや内傾する。また底面は上げ底を呈する。
- 施文は、口縁直下より繩文が左下がりに施文される。このように口縁下より繩文のみを施文するタイプは、やはり粗製土器の一大タイプとして把握できるように考える。
- 色調は、外面黒褐色一部黄褐色、内面黄褐色下半一部黒色、胎土・焼成は良い。

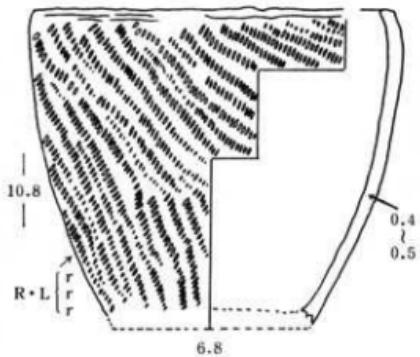
〔鉢形土器〕 -51

〔J 2 III〕 (現存 $\frac{3}{4}$ —図上復原)

51



12.2



〔鉢形土器〕 -51 (粗製)

☆ ここに掲げたものは、A地区 J 2 グリット層出土、第八群土器（大洞C 2 式）である。

- ・ このものの器形は、平縁で口頸部は内傾するものである。底部直上から欠失しているため底面は不明である。
- ・ 施文は、口縁直下より縄文が右下りに斜行するもので口縁下は横方向に整形されている。
- ・ 色調は、外面灰褐色、内面上半赤褐色、下半黒色、胎土・焼成とも良好である。